

14. 凹線文系甕の取入れ方の二相：加賀と尾張の比較

Variations in the adoption of Osenmon-type jars: a comparison between Kaga and Owari areas.

小林正史*

Masashi Kobayashi

* 北陸学院短期大学
Hokurikugakuin Junior College
11, I, Mitsukouji, Kanazawa
Ishikawa, 920-1396

(1) 目的

第四様式期の山陽・山陰では凹線文甕が甕の主体を占めるのに対し、北陸と東海では凹線文系甕と「タタキと内面ケズリを用いなく字口縁甕（北陸）やハケ・ナデ甕（東海）」が組み合わされることから、凹線文系甕は中国地方から北陸と東海地方に伝わったことが明かである（石黒 1990, 深澤 1994）。煮炊き用土器は調理の方法や調理量などに応じて最も使いやすいように作り分けられている面も多いと考えられるので、本稿では以下の3点から甕の作り分けを検討する。第一に、東海と北陸において、中国地方から伝播した凹線文系ケズリ甕と在地系ハケ・ナデ甕がどのように、どの程度作り分けられているか。第二に、凹線文系甕が、これら3地域間でどのような共通性と違いを示すか、また、その違いを生み出した要因は何か。第三に、3地域の凹線文系甕が大きさや形によりどう作り分けられているか。

(2) 分析方法

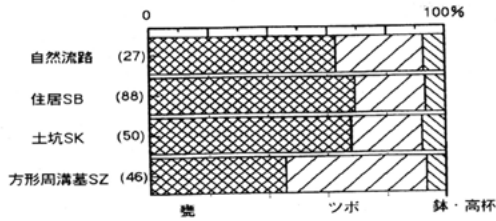
A. 一色青海における資料の選択（第14-1・2図）

本稿では、容量、相対的深さ、底部形態、器面調整、黒斑など、底部付近まで残っていないと分析しにくい属性を扱うため、容量の測定できる甕

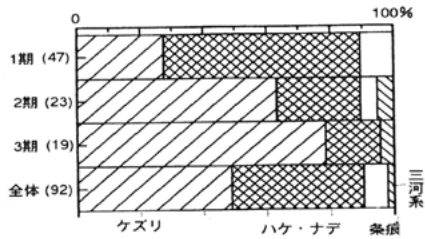
を分析の基本資料とした。ただし、一部の分析では胴部最大径部位まで残る（容量クラスが認定できる）甕も用いた。容量は藤村東男 1981 の方法で測定した（詳細は小林 1995 参照）。底部まで残っていないとしても胴部長の7割程度まで残存する甕では、図上復元した実測図から容量を測定した。この場合、底部付近は径が小さいため、器高の推定値に数ミリ程度の違いがあったとしても容量の違いはわずかである。

一色青海遺跡では、型式学的に個々の土器の時期を認定するのではなく、各遺構から出土した土器全体で遺構の時期を決定し、その遺構の時期を出土土器の時期とした。本書の一色青海Ⅰ～Ⅲ式を以下では1～3期と記述した。出土遺構には住居、自然流路、土坑、方形周溝墓の4種類がある。このうち、方形周溝墓は、2期のSZ07・12以外は全て3期に属する。土器は主として周溝から出土したが、墳丘部からの流れ込みと考えられる。方形周溝墓の器種組成では、壺の比率が5割近くであり、自然流路・住居・土坑（甕が6～7割、壺が2～3割）よりも明瞭に高い（第14-1図）。壺は日常の使用では甕よりも壊れにくいため組成比がそれほど高くないことが多い。よって、壺の比率が高い方形周溝墓の組成は、墳丘での儀式に使用された後に一括廃棄されたことを示唆している。一方、甕の容量クラス組成（区分方法は後述する）は他の遺構と大差ないことから（第14-2図）、甕の使われ方は日常の調理と大差なかったと思われる。

なお、住居は火災を受けた例が多いため、出土土器は全体に加熱を受けたものが多く、また復元可能土器の比率が高い。



第 14-1 図 遺構別の器種組成

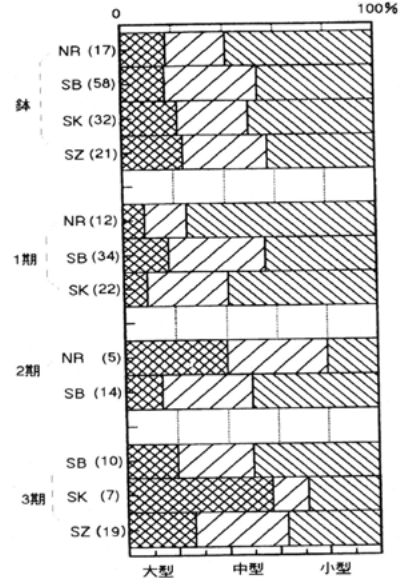


第 14-3 図 一色青海の各期の甕の類型組成

B. 一色青海の甕の類型

内外面調整により甕をケズリ甕（内面下半部がケズリ）、ハケ・ナデ甕（外面ハケメ、内面ハケメかナデ）、内外面ナデ甕、外面条痕文深鉢に分類した。これらは各々、石黒氏の分類の凹線文系甕、伊勢湾西岸・尾張系甕、三河系甕、美濃系深鉢に相当する（石黒 1990a, 1991）。これらのうち一色青海遺跡では前二者が主体を占める。

ケズリ甕：外面にタタキ目がみえる甕は例外なく内面にケズリが施される。一方、内面ケズリの甕にはタタキ目が観察できないものがあるが、外面のハケメによりタタキ目が完全に消されたと考えた。このような内面ケズリとタタキの組合せは山陽・山陰地方の凹線文甕から伝わった特徴と考えられるが、東海地方のケズリ甕は、①口縁部外面に凹線文がなく、かわりに刻み目が付くことが多い、②口縁部内外面は、横ナデが顕著ではなく、ハケメで仕上げられる、③外面上部に横方向のハケメが施されるものも多い、④第四様式期後葉になると台付きが増える、などの点で吉備や北陸の凹線文系甕との違いが明瞭である（石黒 1990b, 1991）。しかし、ケズリとタタ



第14-2図 遺構別の甕の容量組成(胴部最大径から推定)

キの組合せはこれら3地域の凹線文系甕の最も重要な特徴なので、以下の一色青海の記述では、「ケズリ甕」と「凹線文系甕」を同義語として用いた。

ハケ・ナデ甕：朝日遺跡の第四様式（高蔵式）期では、尾張系甕（朝日遺跡の周辺では在地産と考えられる）と伊勢湾西岸系甕は以下の違いを持つと指摘されている（石黒 1990b; 1991）。第一に、尾張系甕は大半が台付きなのに対し、伊勢湾西岸系甕は大半が平底である。第二に、尾張系甕は内面胴部に斜め・横方向の板ナデが施されることが多い（ハケメは残るものと残らないものがある）のに対し、伊勢湾西岸系甕は、縦の指ナデで消されている場合もあるが、ハケメが残る場合も多い。第三に、伊勢湾西岸系甕では外面上部に横方向のハケメが施されることが多い。第四に、尾張系甕は伊勢湾西岸系甕よりもハケメが細かい傾向がある。第五に、伊勢湾西岸系甕は口唇部が外側に延びるものが多いのに対し、尾張系甕は口唇部が丸みを帯びるものが多い。

一方、一色青海遺跡のハケ・ナデ甕では、以下の2点で、尾張系甕の要素と伊勢湾西岸系甕

の要素の折衷が盛んに行われている。第一に、内面ハケメ仕上げと内面ナデ仕上げの折衷的なものも多い。ハケ・ナデ甕の内面胴部の調整には、①全面ハケメ（ハケメ方向は左上がりが多いが横もある；容量測定資料で6個）、②ハケメの上からナデが施され、ハケメが痕跡的に見える（11個）、③胴上・中部がナデで、下部がハケメ（胴上・中部はハケメがナデ消された可能性もある；2個）、④全面ナデ（17個；うち7個は板ナデ）、などの種類がある。後二者は、ハケメと類似する板ナデを除き、ハケメが施されたがナデにより消された可能性がある。第二に、「内面調整がハケメカナデか」と「台の有無」「外面胴上部の横ハケメの有無」との相関が弱い。ただし、「内面全面ナデ甕（尾張系に近い）」は「部分的・痕跡的にも含めハケメが残るハケ・ナデ甕（伊勢湾西岸系に近い）」に比べ、頸部の括れが弱く（「頸部径／胸部最大径×100」が各々84.9と83.3）、相対的深さが浅め（「器高／最大径×100」が各々110.9と117.1）の傾向がある。よって、本稿では、器形の分析では「内面全面ナデの甕」と「ハケメを残す甕」を区別したが、他の分析では「ハケ・ナデ甕」として両者をまとめた。

容量が測定できた甕を対象として類型組成の時間的変化をみると、1期ではハケ・ナデ甕が主体を占めるが、2期になるとケズリ甕が全体の6割以上を占めるようになり、3期では8割近くに達する（第14-3図）。このように、1期から2期への変化が顕著である。また、条痕深鉢は各期とも比率が低い。1、2、3期の順に比率が低くなる。

C. 高蔵式期の比較資料

大渕遺跡では高蔵式期の中での時間的変化が観察できる（石黒1991）。時期を特定できる遺構から出土した甕の中で、容量の測定できるものが21個と少ないので、胴部最大径部位まで残る甕を含めて検討した。胴部最大径部位まで残る55個の甕の

時期構成は、大渕報告書の1期、2a期、2b期（各々は一色青海の1期、2期、3期にほぼ対応する）が各々17個、17個、2個であり、高蔵式期だが細別時期不明が19個ある。よって、時間的変化をみるために一色青海1期相当期と一色青海2・3期相当期との比較を行った。

遺跡内での時間的変化は検討できないが、高蔵式期の甕の容量組成を検討できる資料として朝日遺跡60A区SD02（石黒1994）と阿弥陀寺遺跡（石黒1990b）がある。阿弥陀寺遺跡では、報告書に時期が記されており、胴部最大径部位まで残る甕の時期構成は、Ⅲ-1期、Ⅲ-2期、Ⅲ-3期（各々は一色青海1期、2期、3期にほぼ相当する）が各1個、4個、2個あり、この他に、高蔵式だが細別時期不明が5個あることから、一色青海2期が主体を占めると考えられる。朝日遺跡SD02は、一色青海の2～3期に対応する一括資料である。ただし、①胴部最大径から容量クラスを推定できる甕（全てケズリ甕）が8個しかない（うち容量を測定できたのは5個）、②丸窓付壺や焼成後の穿孔・打ち欠きのある壺（2個）など他の遺構では希な壺が高い比率でみられることから、日常使用の土器の廃棄とは性格が異なる可能性がある、などの点に留意する必要がある。

D. 吉備と北陸の比較資料（第14-4図）

時期幅が第四様式の範囲内で、容量が測定できる凹線文系甕が15個程度以上ある資料を探した結果、中国地方では津寺遺跡中屋地区溝3C（岡山県教育委員会1995）、北陸では戸水B遺跡4～7次調査資料（中屋ほか1992、中屋1994、小林1994）が該当した。両資料において胴部最大径部位まで残る（容量クラスが推定できる）甕を対象とした。津寺遺跡：甕は凹線文甕のみで構成され、弥生中期末（～後期初頭）に位置づけられる。吉備の当該期では、全体器形と内外面調整の特徴は甕と共通するが、頸部の括れ度が壺と甕の中間の値

を示す大型土器（報告書では壺に分類される）がある。容量と頸部の括れ度のプロットグラフに煤・コゲの有無（河合忍氏のご教示による）を示した第14-4図をみると、①括れ度50以上の甕は大半が煤・コゲが付くのにに対し、50以下の4個は煤の付くNo.242を除き炭化物が付かない（煮炊きに使われていない）、②括れ度50以上の甕は平底なのに対し、50以下の4個は丸底気味で自立できない、③相対的深さ「器高／最大径×100」は、括れ度50以下の4個（全て120以下）の方が括れ度50以上の甕（後述する249を除き全て120以上）よりも浅めである、という属性間の結び付きがみられる。よって、「括れ度50以下、容量10リットル以上の土器」は壺に分類した。甕に分類した13個の実測図資料のうちNo.249は、①相対的深さが極端に浅めである、②20リットル近い大きさの割には括れ度が弱い、③炭化物が付かない、などの点で特異である。

戸水B遺跡：外来の近江系甕を除き、内面にケズリが施されるものを凹線文系甕、内面全体がハケメ仕上げの甕をく字口縁甕とした。く字口縁甕は前段階（弥生中期後半の磯部式）から連続した変化が追えるのに対し、凹線文系甕は、①タタキ成形が施される、②く字口縁甕は凹線文が付かず（1個のみ例外）、口縁部内外面がハケメ仕上げのことが多い（25/35個）のに対し、口縁部内外面に横ナデが施され（2個のみ例外）、口縁部外面に凹線文が付く例が多い（34/41個）、など多くの点で中国地方の凹線文甕と共通性が強い。

E. 集計方法

甕の組成の集計には、①容量測定資料、②胴部最大径まで残り容量クラスが判定できる資料（容量測定資料を含む）、③底部資料、の3つを目的に応じて使い分けた。胴部最大径資料は、容量測定資料の個数不足を補うために重要だが、「胴下部

を欠くため容量が測定できない胴部最大径資料」では、外面のタタキ痕や内面のケズリがみられる場合はケズリ甕と認定できるが、内面がハケメかナデ仕上げの場合は胴下部にケズリが施される場合もあるのでケズリ甕かハケ・ナデ甕か判定できない。このように、胴部最大径資料は、容量測定資料に比べてハケ・ナデ甕の比率が過大評価される可能性があるため、甕の類型組成には用いなかった。また、底部資料（底部まで残る容量測定資料を含む）は、底部形態の分析のみに用いた。

（3）容量による甕の作り分け

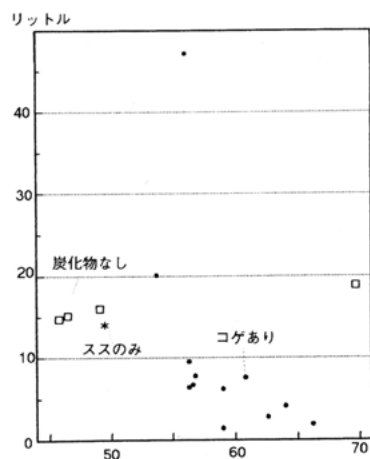
A. 一色青海の容量分布（第14-5・6図）

甕の容量を小さいものから大きいものへとx軸上に並べた折線グラフ第14-5図（容量順折線グラフと呼ぶ。線はなくともよい）、および、容量と時期のプロットグラフ第14-6図を用いて、甕の容量分布を時期間・類型間で比較した。その結果、ケズリ甕は3リットル付近、4リットル付近、5リットル台に顕著なまとまりがあるため、4リットル弱と5リットル弱に顕著な谷部分布の断絶がみられた。また、ハケ・ナデ甕も5リットル強に最も顕著な谷部があり、4リットル付近と3リットル付近にも弱い谷部がある。なお、条痕深鉢は容量を測れた個数が少ないが、5リットル弱に弱いまとまりがあることから、やはり5リットル付近を境に作り分けられた可能性がある。以上のように、資料数が多いケズリ甕とハケ・ナデ甕では、共に5リットル付近に最も顕著な谷部がみられ、個数が少ない条痕深鉢の容量分布もそれとは矛盾しない。

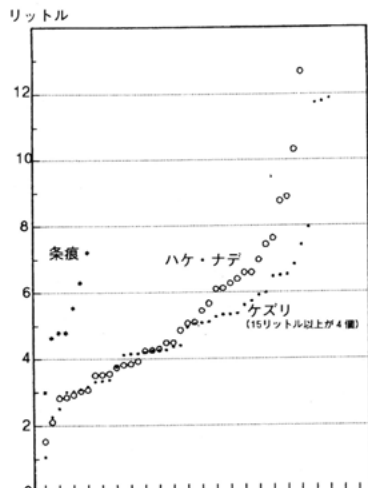
ケズリ甕とハケ・ナデ甕は、共に、8リットルを境に分布が希薄になり、また、3リットル未満の甕が3個以下と少ない。以上の容量分布の特徴から、8リットルを境に大型と中・小型に分け、また、5リットルを境に中小型を中型と小型に分けた。

B. 一色青海の甕の時間的変化（第14-7～10図）

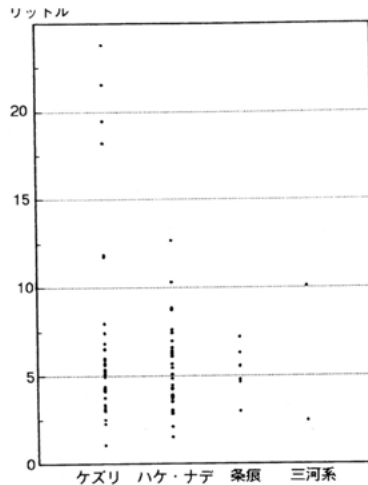
14. 凹線文系甕の取入れ方の二相：加賀と尾張の比較



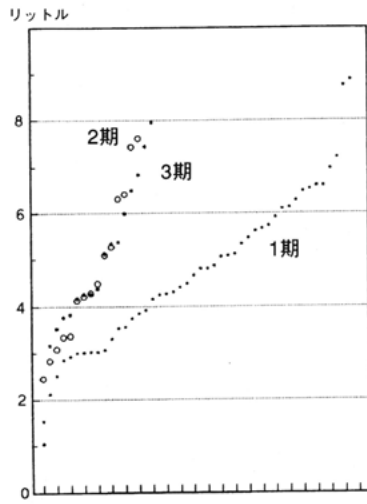
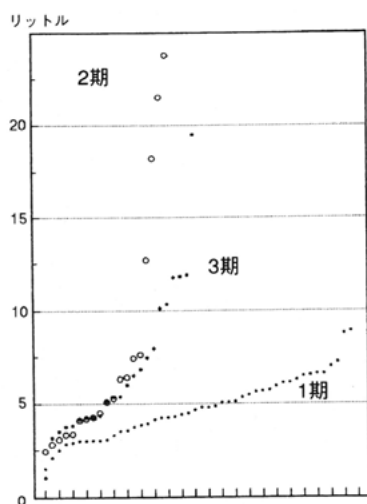
第 14-4 図 津寺の甕の容量 (y 軸) と括れ度 (x 軸)



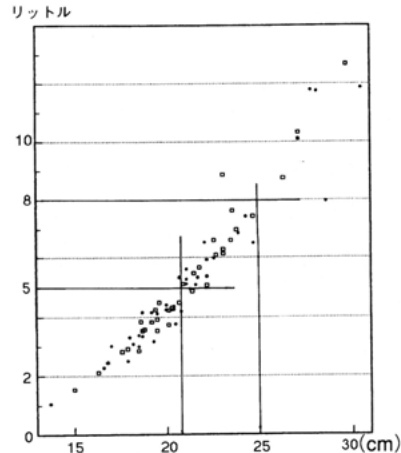
第 14-5 図 一色青海の各種の甕の容量分布



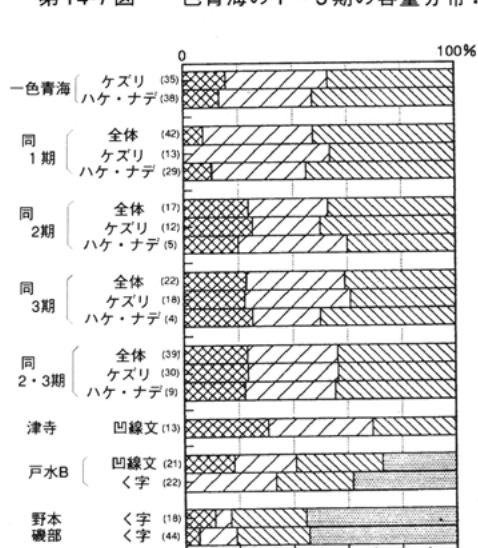
第 14-6 図 一色青海の各種の甕の容量分布



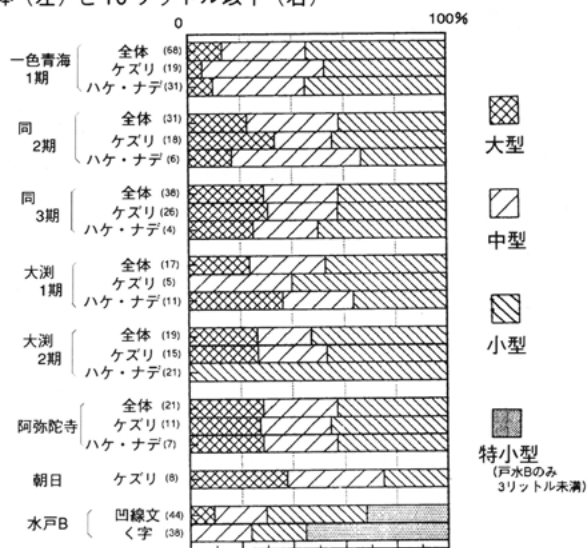
第 14-7 図 一色青海の 1～3 期の容量分布：全体 (左) と 10 リットル以下 (右)



第 14-8 図 一色青海の容量 (y 軸) と胴部最大径 (x 軸) の関連



第 14-9 図 甕の容量組成



第 14-10 図 胴部最大径から推定した容量組成

8リットル以上の大型の比率は1期(3/47個)、2期(4/19個)、3期(6/23個)の順に高くなる半面、3リットル未満の比率は以下のように低くなる(第14-7図)。即ち、1期では3リットル付近に明瞭なまとまりがみられるが、2期になるとそのまとまりが不明瞭になり2.5リットル～3.5リットルの範囲に拡散し(3リットル以下は2個のみ)、さらに3期では1リットル付近の1個を除き全て3リットル以上となる。このように、1期、2期、3期の順に甕の容量が大型化する傾向がみられる(第14-9図)。この理由として、実際に使われた甕の容量が大型化した場合と、廃棄方法が時期により異なる場合(例えば、墓の副葬土器は大型品が少ない)が考えられるが、容量組成は遺構間で大差ないことから(第14-2図)、前者の可能性が高い。

次に、8リットル未満の中での分布の谷部は、1期では不明瞭だが、2期では3リットル付近や4リットル台に弱いまとまりがみられるようになり、さらに3期では5リットル付近に明瞭な谷部がみられるようになる(第14-7b図)。このように、1期から3期へと小型と中型の作り分けが明瞭になる。

上述の分析では、2・3期の資料数が少ないことが難点である。そこで、容量が測れないが胴部最大径部位まで残る甕についても、以下の方法で容量クラス(大・中・小型)を推定した。甕の容量と最も強い相関を示すのは胴部最大径である。容量(y軸)と胴部最大径(x軸)のプロットグラフをみると、条痕深鉢と内外面ナデ甕を除いて、二次関数の回帰曲線に沿った分布がみられる(第14-8図)。大型と中・小型の境である8リットルは、胴部最大径25cmに対応する。容量を測れた甕では、1個を除き、8リットル以上は胴部最大径25cm以上、8リットル未満は25cm未満だった。一方、中型と小型の境(5リットル)は胴部最大径20.7cmに対応する。ただし、5リットル以上の甕は全て胴部最大径20.7cm以上だが、5リットル未満の甕でも胴部最大径20.7cm

以上のものが3個あった。このように、多少の誤差を伴うものの容量が測れない甕でも胴部最大径から容量クラスを推定できるので、これらを加えて容量組成を算定した。その結果、やはり、1期、2期、3期の順に大型の比率が高くなり、小型の比率が低くなる(中型の比率は大差ない)傾向が観察された(第14-10図)。

C. 一色青海の甕類型間の比較(第9～12図)

ケズリ甕では、1期、2期、3期とも5リットル付近に分布の谷部があり、3リットル未満が少ない(第14-11図)。ケズリ甕の容量クラス組成では、①1期から2・3期へと大型の比率が高くなる、②1・2期(約5割)から3期(約4割)へと小型の比率が低くなる、などの点で、1期から3期へと徐々に大型化する(第14-9・11図)。胴部最大径から容量クラスを推定した甕を加えた場合でも、ほぼ同様の傾向がみられる(第14-10・12図)。

また、ハケ・ナデ甕も、1期から2・3期(資料数が少ないため一括)へ大型の比率が高くなり(1割程度→2割程度)、小型の比率がやや低くなる(第14-9図)。胴部最大径から推定した容量クラスでも同様である(第14-10図)。このように、ハケ・ナデ甕とケズリ甕は、①1期では両者の容量組成に明瞭な違いがみられない、②両者とも1期から2・3期へ容量が徐々に大型化する、という点で共通性が強い。

D. 高蔵式期の他遺跡との比較(第14-10・13・14図)

一色青海における上述の傾向が他の高蔵式期の遺跡でもみられるかどうかを検討した。大淵では、容量と胴部最大径の対応関係は一色青海の甕と共通する特徴がみられたので、一色青海と同様に胴部最大径20.7cmと25cmを境に小型、中型、大型に分けた。甕の胴部最大径の分布をみると、ケズリ甕、ハケ・ナデ甕とも容量5リットルに対応する20.7cm付近に谷部がみられた(第14-13図)。また、時

期毎にみても、1期では胴部最大径21cm付近、2・3期では20～21.5cm部分に谷部がみられ、容量5リットル付近で作り分けられたと考えられる（第14-14図）。このように、大測の容量分布は、ケズリ甕とハケ・ナデ甕とも5リットル付近で中型と小型に作り分けられる点で一色青海と共通する。

一方、大測の容量組成は、一色青海と以下の様な違いがみられた（第14-10図）。第一に、1期と2期の容量組成に明瞭な違いがなく、一色青海でみられたような甕の大型化傾向は観察できない。第二に、1期では、主体を占めるハケ・ナデ甕は大型が4割弱を占めるのに対し、ケズリ甕は大型がみられず小型が過半数を占める。ただし、1期のケズリ甕は5個と少ないことから、「1期ではケズリ甕よりもハケ・ナデ甕の方が大型である」という傾向がサンプリング誤差かどうかは、資料の増加を待って判断したい。

阿弥陀寺では、一色青海と同様に、ケズリ甕（11個）とハケ・ナデ甕（7個）の容量組成には明瞭な違いがない。そして、全体の容量組成は、大型3割弱、小型4割強であり、一色青海2期の容量組成と類似する（第14-10図）。

朝日の容量組成は、大型3個、中型3個、小型2個であり、一色青海遺跡の2・3期よりもさらに大型が多く小型が少ない（第14-10図）。

以上の結果は次のようにまとめられる。第一に、5リットル付近を谷部して中型と小型が作り分けられる点が高蔵式期の各遺跡で共通する。

第二に、一色青海、阿弥陀寺、朝日では1期から2・3期へと甕がやや大型化する。ただし、大測では1期と2・3期の容量組成は大差がないことから、東海地方全体に共通した変化かどうかは今後さらに検討が必要である。

第三に、各遺跡において、ケズリ甕とハケ・ナデ甕は、①1期では5リットル付近に最も顕著な谷部がある（2・3期はハケ・ナデ甕が少ないため不

明）、②1期から2・3期へと大型の比率が高まり小型の比率が低くなる、③資料数が少ない大測を除き、1期と2・3期の容量組成に明瞭な違いはみられない、などの点で共通の特徴を持ち、両者が容量により作り分けられていない。

E. 吉備・北陸との容量の比較

a. 吉備と北陸の容量分布の特徴（第14-4、15～17図）

津寺の凹線文甕（第14-4図）では、5リットル付近に最も顕著な谷部があり、また、8～10リットルを境に分布が希薄になる。この2つの特徴は一色青海遺跡のケズリ甕と共通する。

戸水Bでは、甕全体の分布は3リットル付近に最も顕著な谷部があり、7リットル以上は分布が希薄になる（小林1997）。戸水Bの凹線文系甕は4リットル付近と5リットル付近に顕著な谷部があり、また、7～8リットルも空白になっている（第14-15図）。3リットル以下が5個しかないため、3リットル付近の谷部は不明瞭である。一方、戸水Bのく字口縁甕は、3リットル付近に最も顕著な谷部があり、8リットル以上はない。容量を測定できた凹線文系甕とく字口縁甕は各20個程度しかないため、上述の傾向を補強するために、胴部最大径から推定した容量クラスの組成も検討した。戸水Bの甕の容量と胴部最大径のプロットグラフ（第14-16図）をみると、8リットルの谷部は胴部最大径24cm、5リットルの谷部は21cm付近、3リットルの谷部は17.5cmに対応する。胴部最大径を小さい値から大きい値に並べた折れ線グラフ（第14-17図）をみると、凹線文系甕では21cm付近に、く字口縁甕では17.5～18.5cm付近に最も顕著な谷部があり、容量の分布とほぼ共通した特徴が観察された。

b. 3地域の容量分布の比較

3地域の凹線文系甕とハケ・ナデ甕の容量分布の谷部の位置を比べると、以下の点が指摘される。

第一に、5リットル付近に最も顕著な谷部がある点

は、津寺、戸水B、一色青海の凹線文系甕に共通した特徴である。

第二に、戸水Bのく字口縁甕は、3リットル付近に最も顕著な谷部がある点で、前段階の磯部・野本のく字口縁甕の特徴を継承し、凹線文系甕との違いが明瞭である（小林1994, 1997）。

第三に、一色青海のハケ・ナデ甕は、ケズリ甕と同様に5リットル付近に最も顕著な谷部がある。一色青海のケズリ甕における5リットル付近の谷部は1期ではあまり明瞭でないことから、この特徴はケズリ甕からの影響のみでは説明できない。よって、凹線文系甕からの影響と前段階のハケ・ナデ甕から継承した特徴とが複合した結果と考えられる。

第四に、8リットル付近で大型と中小型に区分できる点は、戸水Bの凹線文系甕とく字口縁甕、戸水Bの前段階（磯部、野本遺跡）のく字口縁甕、一色青海のケズリ甕とハケ・ナデ甕に普遍的にみられる特徴である（小林1994, 1997）。よって、津寺では8リットル以上の甕が4個しかないため大型と中小型の境を決め難いが、資料数が増えれば8リットル付近に谷部が見いだせると思われる。

c. 3地域の容量組成の比較（第14-9・10図）

上述の結果より、戸水Bと津寺では、一色青海と同様に、8リットルと5リットルを境に大型、中型、小型に分類した。さらに、戸水Bのく字口縁甕では3リットルにも谷部があることから、戸水Bのみ3リットル未満の特小型を設定した。容量組成を3地域間で比べると以下の点が指摘される。

第一に、津寺の凹線文系甕は、一色青海・戸水Bの凹線文系甕に比べ小型の比率が低く、大型の比率が高い点で、より大きい傾向がある。

第二に、戸水Bでは、凹線文系甕はく字口縁甕よりも大型の比率が高く（大型は全て凹線文系が占める）、特小型の比率が低い（胴部最大径資料で特に明瞭）点で、より大きめの傾向がある。また、戸水Bの前段階の野本・磯部（く字口縁甕主体）で

は、5リットル未満が8割を占め、戸水Bのく字口縁甕よりもさらに小さい傾向がある。よって、戸水Bにおいて凹線文系甕がく字口縁甕よりも大きめなのは、両者が各々の系統（即ち、中国地方の凹線文系甕と北陸の前段階のく字口縁甕）の特徴的な容量組成を継承しているためと言える。一方、一色青海では、1期から2・3期へと甕が大型化するが、各時期においてケズリ甕とハケ・ナデ甕の容量組成は共通性が強い。

第三に、甕全体の容量組成は、津寺（凹線文系甕のみ）、一色青海（ケズリ甕とハケ・ナデ甕がほぼ半々）、戸水B（凹線文系甕とく字口縁がほぼ半々）、野本・磯部（く字口縁甕主体）の順に小型の比率が高く（各々、約3割→約5割→6割強→8割強）、大型の比率が低くなる。大淵・阿弥陀寺・朝日では一色青海よりもさらに大きめの傾向があることから、「凹線文系甕とハケ・ナデ甕とも、北陸よりも東海の方が大きめである」と言える。これは、東海地方の第四様式期の甕が前段階の条痕文系甕以来の容量組成の特徴を継承しているためと思われる。

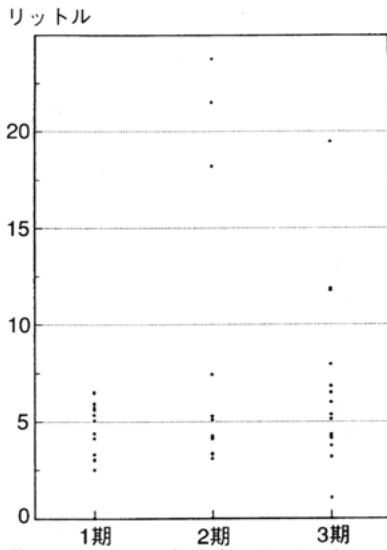
第四に、北陸では、野本・磯部（第四様式の前段階から第四様式の初頭）から戸水Bへと甕が大きめになるが、これは、一色青海における1期から2・3期への甕の大型化と共通する現象とみることができる。

（4）器形

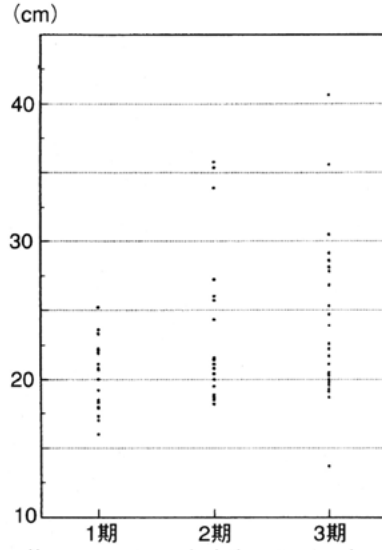
A. 頸部の括れ度（第14-18・19・22図、第14-1表）

一色青海の甕（美濃系深鉢を除く）の頸部の括れ度（頸部径／胴部最大径×100）は、後述するように容量と明瞭な相関を示さない（第14-19図）、分布範囲も71～98に限られるので、標準偏差を考慮すれば平均値により時期間・類型間を比べることができる。甕全体では1期から2期へと

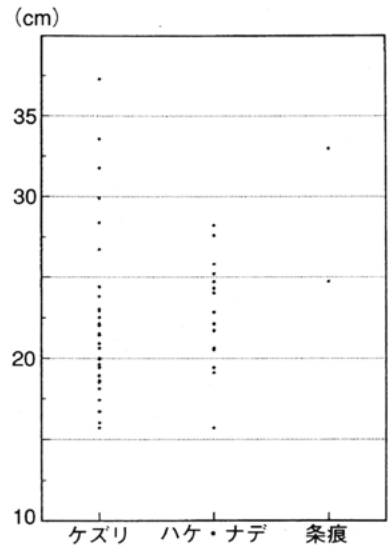
14. 凹線文系甕の取入れ方の二相：加賀と尾張の比較



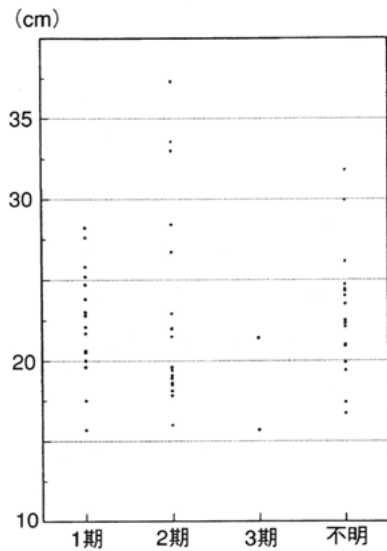
第 14-11 図 一色青海のケズリ甕の容量分布



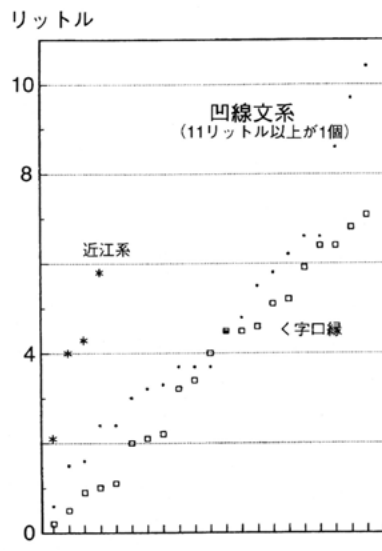
第 14-12 図 一色青海のケズリ甕の胴部最大径分布



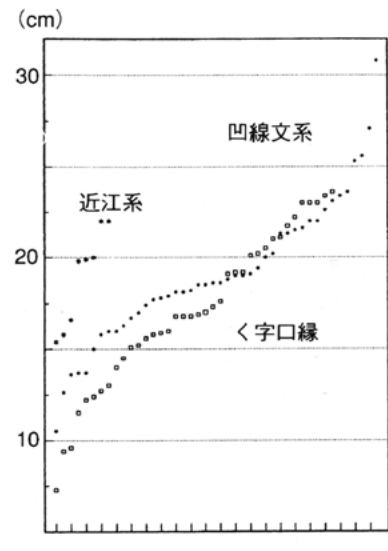
第 14-13 図 大淵の各種の甕の胴部最大径分布



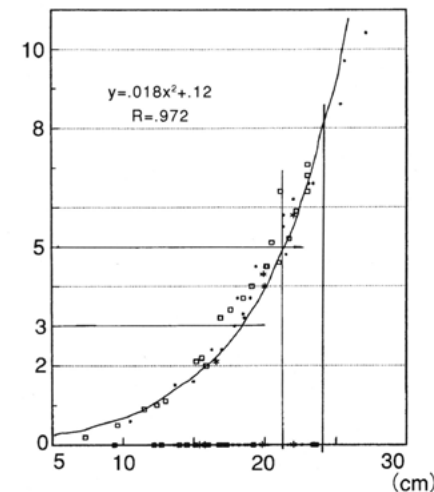
第 14-14 図 大淵の各期のリットル 胴部最大径分布



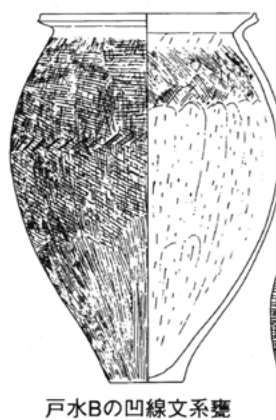
第 14-15 図 戸水Bの甕の容量分布



第 14-17 図 戸水Bの各種の甕の胴部最大径分布



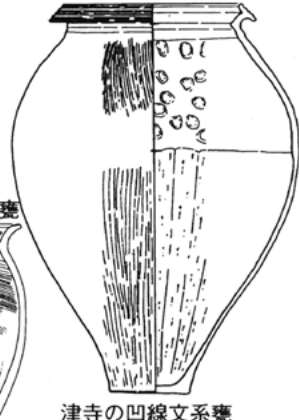
第 14-16 図 戸水Bの甕の容量 (y 軸) と胴部最大径 (x 軸) の関連



戸水Bの凹線文系甕



戸水Bのく字口縁甕



津寺の凹線文系甕

括れが強まる（括れ度の値が小さくなる）が、2期から3期へはわずかに括れが弱まる（第14-18図）。標準偏差値は3時期間で大差なく、資料数も20個近くかそれ以上あることから、この変化はサンプリング誤差とは考えにくい。高蔵式の前段階の甕は1期の甕よりもさらに括れが弱いことから、「高蔵式の前段階から一色青海2期までは括れ度が強まる変化がみられるが、3期ではこの変化傾向が不明瞭になる」と言える。

次に、ケズリ甕、ハケ甕（部分的・痕跡的なものも含めハケメが残る）、ナデ甕（内面全面ナデ）の各類について時間的変化をみると、ケズリ甕は1期から3期へと括れがわずかに弱まるのに対し、ハケ甕とナデ甕（2・3期の資料数が少ないため2・3期を一括）は、共に1期から2・3期へと括れがやや強まる（第14-18・22図）。これら3種類の類似度をみると、1期ではナデ甕、ハケ甕、ケズリ甕の順に括れが強まり、3者間の違いが大きいのに対し、2・3期になるとハケ甕とケズリ甕の違いが小さくなり、かつ、ナデ甕も括れが弱まるため、3者間の違いが小さくなる（第14-22図）。

B. 相対的深さ（第14-20・22図、第14-1表）

頸部の括れ度と同様に、相対的深さ（台部を除いた器高／最大径×100）は容量と相関を示さないもので、標準偏差を考慮して平均値により器種間と時期間の比較を行った。甕全体では、1期、2期、3期の順に浅めになる。頸部の括れ度に比べ、一定方向の変化を示すことが特徴である。

相対的深さは、1期ではケズリ甕（平均124.5）、ハケ甕（116.8）、ナデ甕（113.0）の順に浅めになり、3者間の違いが大きい。一方、2・3期になると、ハケ甕とナデ甕は1期と大差ないのに対し、ケズリ甕は急激に浅めになるため、3者間の違いが小さくなる（第14-22図）。

C. 底部形態（第14-21図）

a. 甕類型間の比較

台付と平底の割合について、底部まで残っている甕、および、甕と認定された底部破片（本書に実測図が掲載された資料）を対象として検討した。後者（底部破片）の甕類型を判定する際には、ケズリ甕ではケズリが内底面まで及ばないことがある点に留意する必要がある。よって、残存部の高さが内底面から2cm未満の小破片では、内底面付近にケズリが見える場合にはケズリ甕と認定したが、ナデ調整の場合はハケ・ナデ甕の場合と「ケズリが底面まで及ばない場合」の2つの可能性があることから、「類型不明」とした。

一色青海全体では台付の比率は31.7%であり、大淵（口縁部から底部まで残る甕の75%）よりも著しく低い。朝日でも高蔵式期の台付の比率が高い（特に、尾張系のナデ甕は殆どが台付）と指摘されていることから（石黒1991）、一色青海遺跡と大淵・朝日遺跡の違いは地域差を反映している。

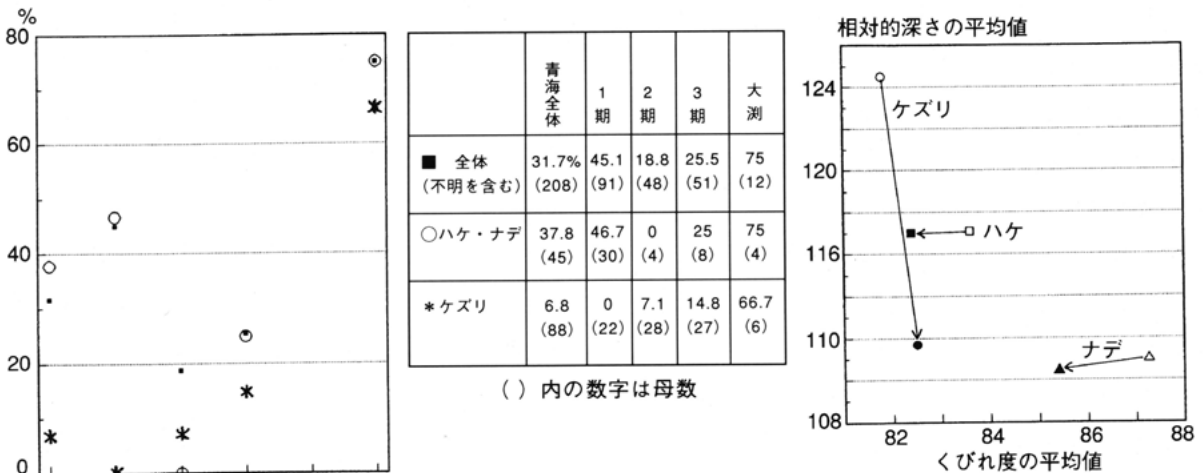
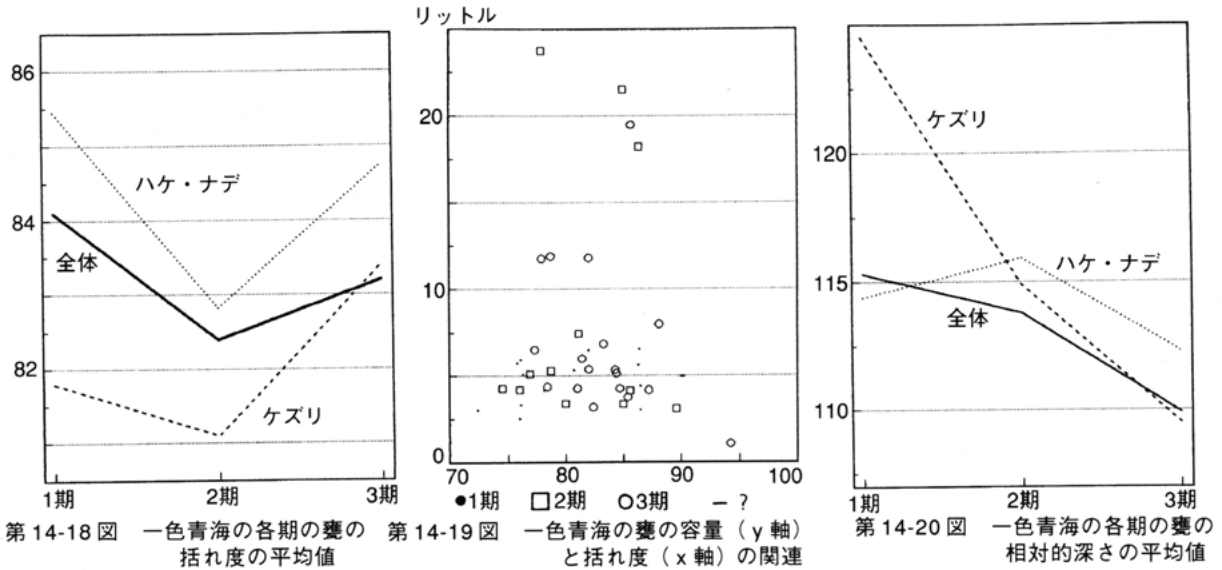
一色青海（1～3期）では、ケズリ甕（6.8%）よりもハケ・ナデ甕（37.8%）の方が台付の比率が高い。また、組成比率は少ないが、三河系甕は全て台付、条痕深鉢は全て平底である。

b. 時間的変化

ケズリ甕では台付の比率は1期（0%）、2期（7.1%）、3期（14.8%）と徐々に高くなるが、各期とも2割以下にとどまっている。一方、ハケ・ナデ甕では1期（46.7%）から2・3期（各々0%と25%）へと台付の比率が減少する。ただし、2・3期の類型不明の台付の多くがハケ・ナデ甕だったならば、ハケ・ナデ甕の台付の比率は1期と2・3期の間で大差ないことになる。

甕全体の台付の比率は、1期（45.1%）から2期（18.8%）へと低くなるが、3期（25.5%）になるとやや増加する。1期から2期へ台付が減るのは、ハケ・ナデ甕からケズリ甕に交代したためであり、また、3期に増加するのはケズリ甕の中での台付の比率が徐々に増加したためである。

14. 凹線文系甕の取入れ方の二相：加賀と尾張の比較



第 14-1 表 頸部の括れ度と相対的深さの平均値

* 頸部の括れ度

		大 型		中 型		小 型	
		個数	平均値	個数	平均値	個数	平均値
一色青海	ケズリ甕	1	(84.1)	9	80.8	9	82.6
	ハケ甕	1	(84.8)	4	77.1	5	83.4
	ナデ甕	2	89.0	7	86.5	12	88.0
戸水B	凹線文系甕	5	67.5	8	71.5	29	73.6
	く字口縁甕	1	(63.6)	8	71.2	31	82.0
津寺	凹線文甕	4	58.9	5	57.9	4	63.0

* 相対的深さ

		大 型		中 型		小 型	
		個数	平均値	個数	平均値	個数	平均値
一色青海	ケズリ甕	0	-	7	123.7	6	125.5
	ハケ甕	1	(106.8)	4	116.3	5	119.1
	ナデ甕	2	125.8	5	114.3	10	109.8
戸水B	凹線文系甕	3	135.4	2	136.4	8	127.9
	く字口縁甕	0	-	2	128.5	10	128.3
津寺	凹線文甕	4	121.0	5	136.0	3	121.0

第 14-2 表 容量と頸部の括れ度・相対的深さの関連

* 容量と頸部の括れ度の相関係数

		全 体			中小型		
		個数	相関係数 R	有意確率 P	個数	相関係数 R	有意確率 P
一色青海	ケズリ甕	45	- 0.029	0.85	38	- 0.172	0.303
	ハケ・ナデ甕	15	- 0.026	0.926	12	- 0.668	0.018*
戸水B	凹線文系甕	21	- 0.519	0.016*	17	- 0.288	0.263
	く字口縁甕	22	- 0.708	0.0002*	17	- 0.708	0.0002*
津寺	凹線文甕	13	- 0.250	0.410	9	- 0.630	0.069

* 容量と相対的深さの相関係数

		全 体			中小型		
		個数	相関係数 R	有意確率 P	個数	相関係数 R	有意確率 P
一色青海	ケズリ甕	45	- 0.209	0.169	38	- 0.020	0.907
	ハケ・ナデ甕	15	- 0.284	0.306	12	0.069	0.832
戸水B	凹線文系甕	13	0.306	0.306	10	0.497	0.144
	く字口縁甕	12	0.262	0.411	12	0.262	0.411
津寺	凹線文甕	12	- 0.070	0.829	8	0.638	0.089

c. 容量クラスと底部形態の関連

ケズリ甕では、台付は2個とも小型であり、中・大型はいずれも平底である。一方、ハケ・ナデ甕では、台付の比率が5割程度と高く、小型だけでなく中型にも台付がある。ただし、大型では底部形態がわかるものが平底2個のみのため、台付の有無はわからない。

d. 器形と底部形態の関連

相対的深さは、以下の点で「台付か平底か」と関連する。第一に、甕類型に関わりなく、台付甕の方が平底甕よりも浅めの傾向がある。第二に、相対的深さは台付の比率が高いナデ甕の方がケズリ甕・ハケ甕よりも浅めである。第三に、ケズリ甕は1期から2・3期へと急激に浅めになるが、これはケズリ甕の台付の比率の増加と関連する可能性が高い。一方、1期と2・3期で台付の比率が大差ないハケ甕とナデ甕では、相対的深さも1期と2・3期で大差ない(第14-22図)。

このように台付の方が平底よりも浅めの傾向がある理由として、台付の方がより底部近くから加熱できる、台付では胴上部に炎が当りにくくなる、などの点があげられる。

D. 一色青海の器形の時間的変化(第14-22図)

ハケ・ナデ甕が主体を占める1期では、ケズリ甕はハケ甕・ナデ甕に比べ、①頸部の括れが強い、②深めである、③平底の比率が高い、という違いが明瞭にみられた。一方、ハケ・ナデ甕が減ってケズリ甕が大半を占める2・3期になると、ケズリ甕は、①相対的深さが急激に浅くなる、②頸部の括れ度がやや弱くなる、③台付の比率が徐々に高くなる、という変化を示すのに対し、ハケ甕とナデ甕は、①相対的深さは殆ど変化しない、②頸部の括れ度が強まる、③台付の比率がやや低くなる、という変化を示した。その結果、第14-22図にみられるように、1期(白抜き)では括れ度・相対的深さとも3類型相互の距離が大きいのに対し、

2・3期(塗り潰し)になると三者が相互に近づく違いが小さくなる。即ち、石黒氏が指摘したように、ケズリ甕は、2・3期になって甕の主体を占めるようになると、ハケ・ナデ甕の要素を取り入れる方向に変化していく(石黒1990)。

E. 吉備・北陸との比較(第14-1・2表)

a. 凹線文系甕とハケ・ナデ甕の器形の比較

頸部の括れ度と相対的深さについて、平均値と標準偏差により遺跡間を比較した。戸水Bと一色青海では、凹線文系甕の方がハケ・ナデ甕(戸水Bではく字口縁甕)よりも括れが強い。相対的深さは、戸水Bでは凹線文系甕とく字口縁甕の間で明瞭な違いはないが、一色青海では台付の比率が高いハケ・ナデ甕の方が浅めの傾向がみられた。

b. 凹線文系甕の遺跡間比較

凹線文系甕の頸部の括れ度は、津寺、戸水B、一色青海の順に弱くなり、この順に各地域のハケ・ナデ甕の特徴に近づく。東海地方の高蔵式期では凹線文系甕(ケズリ甕)、ハケ・ナデ甕とも頸部の括れが弱い、これは前段階の条痕文系甕の特徴を引いているためと考えられる。

相対的深さは、津寺・戸水Bの方が一色青海(1期)よりも深めである。一色青海のケズリ甕が浅めなのは、台付があることと関連するだろう。

c. 器形と容量の相関度(第14-2表)

相関係数は、正規分布から大きく外れる分布を示す属性では信頼性が低い、8リットル未満の中・小型甕に限定して「容量と頸部の括れ度・相対的深さとの相関度」を計算した。相関度は相関係数と有意確率(相関が偶然に起こる確率であり、値が小さいほど相関度が高い)で示した。

「中小型甕の中で、容量が大きいほど頸部の括れ度が強まる」という傾向は、一色青海と戸水Bの凹線文系甕(有意確率25~30%のとても弱い相関)、津寺の凹線文系甕(有意確率6.9%)、一色青海と戸水Bのハケ・ナデ甕(有意確率5%未満の強

い相関)の順に明瞭になる。なお、大型甕まで含めて相関をみると、戸水Bの凹線文系甕では「大型は中小型よりも括れが強い」という傾向がみられた(大型まで含めると有意確率1.6%の強い相関)のに対し、津寺の凹線文系甕と一色青海の凹線文系甕、ハケ・ナデ甕では「大型と中型は括れ度が大差ない」傾向がみられた。

相対的深さについては、「中小型甕では、容量が大きいほど深めになる」という傾向が津寺(有意確率8.8%)と戸水Bの凹線文系甕(有意確率14.4%)でみられた。一方、一色青海のケズリ甕(有意確率90.7%)とハケ・ナデ甕(有意確率83.2%)ではその傾向がみられなかったが、これは、浅めが多い台付甕を多く含むためと考えられる。

これらの事実は以下のようにまとめられる。第一に、各遺跡において、頸部の括れ度の方が相対的深さよりも容量との相関度が高い。中・大型甕の方が小型甕よりも括れ度が強いのは、「内容物に対する接触頻度(かき回しの頻度など)」の違いを反映する可能性がある(小林1994)。

第二に、戸水Bと一色青海では、「頸部の括れ度と容量の相関度」はハケ・ナデ甕の方が凹線文系甕よりも高いのに対し、「相対的深さと容量の相関度」は凹線文系甕の方がやや高い。

(5) 凹線文系甕の調整工程

A. 凹線文系甕の外表面調整工程

a. タタキ痕類型の設定 (第14-3表)

東海、北陸、吉備の凹線文系甕のタタキは、「胴上部ではほぼ水平だが、胴中部、下部ほど左上がりの傾きが強まる」という特徴を持つ「円弧状タタキ」であり(都出1974, 横山1980, 深澤1998)、土器を手持ちにせず直立した状態で施されたことを示すと考えられている(都出1974, 小林1994)。ハケメに覆われたタタキ痕の見え方にはいくつかの種類があるので、本稿ではタタキ痕の見え方を

基準にして外面の調整工程の類型を設定した。

タタキ痕の見え方には、①タタキ痕なし(タタキがハケメにより完全に消されたと考えられる)、②タタキ痕が痕跡的にみえる(大半がハケメより消された)、③ハケメの下にタタキ痕が明瞭に見える、④タタキ痕が最終調整となっている(タタキの後にハケメが施されない)部分が広く存在する(器面全体においてタタキが最終調整の場合も含む)、の4つがある。また、外面胴上部に最終調整として横ハケメ(連続横ハケメ)が施される場合がある。この「横ハケメの有無」と「タタキ痕の見え方」との関連をみると、「タタキ痕なし」は1個を除いて横ハケメが施され、「タタキ痕が痕跡的」も大半(11/15個)に横ハケメが付く。一方、「タタキが最終調整」は全て横ハケメがなく(ただし、阿弥陀寺では、横ハケメが施される例がある)、「タタキ痕が明瞭」も3/22個しか横ハケメが付かない(第14-3表)。

また、尾張の凹線文系甕の特徴として、外面胴下半部に最終調整として放射状縦ハケメ(底部直上から胴中部付近へと施される長めの縦ハケメ)をいれることが指摘されている(深澤1994)。

このように、タタキ痕の見え方と横ハケメの有無が強い相関を示すことから、ケズリ甕の外面調整工程を以下のように類型化した。

- 0類：タタキ痕がない。大多数に横ハケメが施される。施文手順は、「タタキ→縦ハケメ(タタキ痕を完全に消す)→胴上部の横ハケメと胴下部の放射状縦ハケメ」と考えられる。
- 1類：横ハケメが胴上部に施され、タタキ痕がハケメの下に(多くは痕跡的に)見える。
- 2類：横ハケメがなく、タタキ痕がハケメの下に(多くは広い範囲に明瞭に)見える。
- 3類：タタキが最終調整となっている部分が胴中・上部(最終調整である胴下部の放射状縦ハケメ以外の部分)に広く存在する。横

ハケメはない。タタキ痕が最終調整の部分において、その下にハケメが見えることから、「ハケメ（全面？；一次ハケメと呼称）→円弧状タタキ→部分的なハケメ（全くない場合もある）→下部の放射状縦ハケメ」という手順が考えられる。タタキ目の下に一次ハケメが見えることから、タタキは器面がかなり乾燥した状態で施されており、器壁を締める効果は弱かったと考えられる（深澤1998）。

0・1・2類では、タタキ痕の上に例外なく縦ハケメが施されるため、タタキ痕の下に一次ハケメが施されていたかどうか分からない。しかし、3類のみで観察可能な「一次ハケメの後に円弧状タタキ」という手順が一般的だったとすれば、「一次ハケメ→円弧状タタキ→縦ハケメ（タタキ目が完全または部分的に見える程度に消す）→胴上部の横ハケメ（0・1類のみ）と胴下部の放射状縦ハケメ」という手順が考えられる。また、1類ではタタキ痕が胴中部に限られることが多いのに対し、2類の多くでは胴上・中部に顕著なタタキ痕が見えることから、「1類では横ハケメにより胴上部のタタキ痕が消された」と考えられる。

このように、「タタキ痕種類の各類とも、タタキ成形の前に器面を平滑にする調整（ハケメ）を行った」という仮定が成り立つとすれば、0類（ハケメが入念なため、タタキ痕が完全に消された）、1類、2類、3類の順に工程数が少ないと言える。

b. 時期間の比較（第14-23・24図）

タタキ痕種類の各類の比率を時期間で比べると、3類の比率が1・2期から3期へとやや高くなる傾向がみられる（第14-23図）。この傾向は、大淵でも1期から2・3期へと3類の比率が高くなることや（第14-24図）、3期が主体の朝日では7個中6個が3類である（1個は2類）ことから裏付けられる。また、一色青海では0類が時間と共に

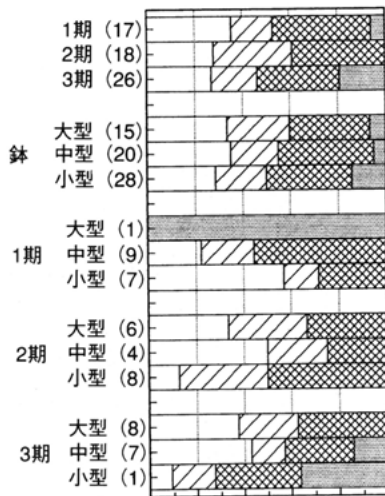
に減る傾向は不明瞭だが、朝日では凹線文導入期（61A区SK02）から凹線文盛行期（60A区SD02）へと（深澤1994）、大淵では1期から2・3期へと、0類が減少する傾向がみられる（第14-24図）。以上のように、東海地方では1期から3期へと3類が増え、1類が減る点で、縦ハケメが入念でなくなりタタキ痕が明瞭に見えるようになると言える。

c. 吉備・北陸との比較

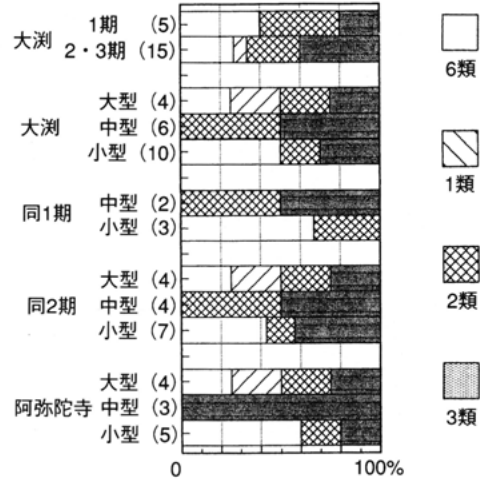
吉備と北陸では、胴上部の横ハケメや「タタキ痕が部分的に最終調整となる3類」が殆どないので、タタキ痕の有無のみを検討した。津寺の凹線文甕では、タタキ痕が痕跡的にみえるものが3/13個（いずれも中型）ある。戸水Bでは、特小型（3リットル未満：0/5個）、小型（3～5リットル：3/16個）、中型（2/8個）、大型（2/5個）の順にタタキ痕がみえる頻度が高くなる。また、内面全体がハケメ・ナデ仕上げのく字口縁甕でもタタキ痕をもつものが特小型に2個（4045と7074）ある。なお、内外面に粘土紐接合痕がみえる比率は、戸水Bの凹線文系甕（4/44個：3リットル未満3個と大型1個）よりもく字口縁甕（12/40個：3リットル未満の特小型6個、3～5リットルの小型3個、中型3個）の方が高いが、これは凹線文系甕にタタキが施された結果、接合痕が消されたためと考えられる。ただし、3リットル未満の特小型の凹線文系甕は、接合痕がみえる頻度が特小型のく字口縁甕と大差ない（各々3/13個と7/22個）ことから、タタキ締めが充分でなかった可能性がある。

タタキ痕の見える頻度は一色青海（33/53個）・大淵（23/31個）の凹線文系甕の方が津寺（3/13個）・戸水B（9/44個）よりも明瞭に高いことから、東海地方の凹線文系甕では最終ハケメ調整があまり入念でなかったと言える。また、一色青海1期では津寺・戸水Bと同様に中型の方が小型よりもタタキ痕が顕著（0類が少なく2類が多い）だが、2・3期になると小型の方が顕著になる（第14-23

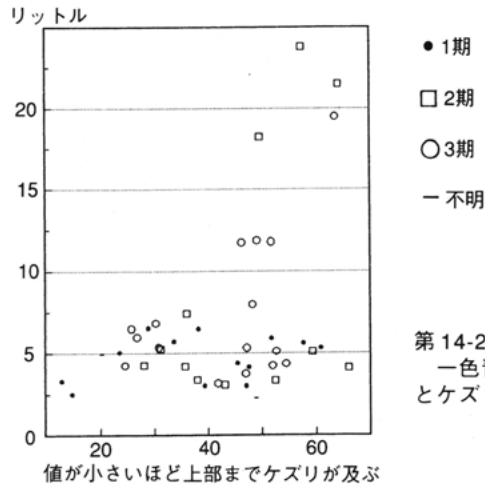
14. 凹線文系甕の取入れ方の二相：加賀と尾張の比較



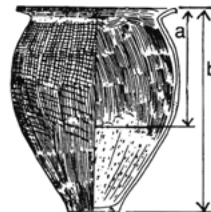
第 14-23 図 一色青海のケズリ甕のタタキ痕類型



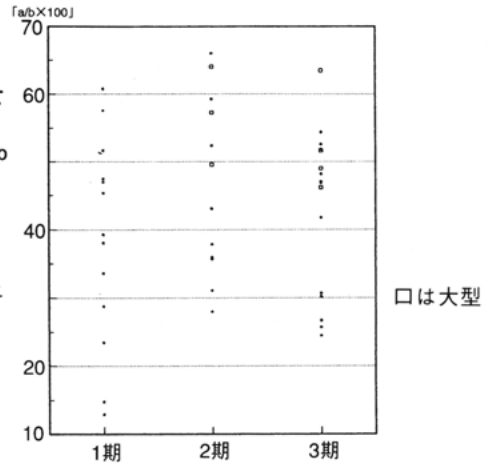
第 14-24 図 大淵・阿弥陀寺のケズリ甕のタタキ痕類型



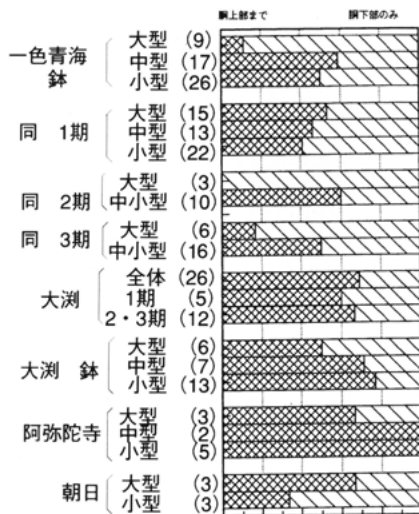
値が小さいほど上部までケズリが及ぶ



第 14-25 図
一色青海の甕の容量 (y 軸)
とケズリ範囲 (x 軸) の関連



第 14-26 図 一色青海の各種の甕のケズリ範囲
□は大型



第 14-27 図 甕のケズリ範囲

第 14-3 表 タタキ痕類型

一色青海				
	0類	1類	2類	3類
胴上部の横ハケメの比率	19/20個	14/14個*	0/23個*	0/6個
タタキ痕の見え方	見えない	20 *	0	0
	痕跡的	0	11	4
	明瞭	0	3	19
合計	20	14	23	6

大淵				
	0類	1類	2類	3類
胴上部の横ハケメの比率	6/8個	2/2個*	0/10個*	1/11個
タタキ痕の見え方	見えない	8 *	0	0
	痕跡的	0	2	0
	明瞭	0	0	10
合計	8	2	10	11

(*は定義による特徴)

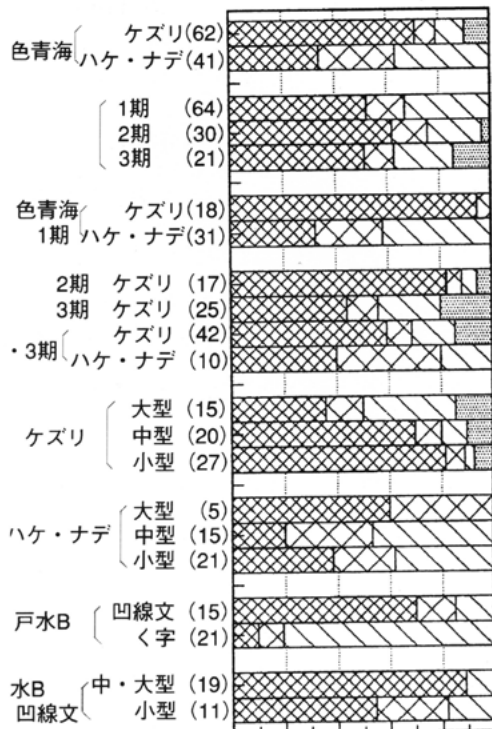
図)。

B.凹線文系甕の内面ケズリ範囲(第14-25~27図)

a.一色青海のケズリ甕

ケズリ甕の内面では、ハケメカナデの後、下半部にケズリによる薄手化がなされる。この内面ケズリの範囲を「口縁からケズリ部の上端部までの長さ/器高×100」の比率により数値化した。この値が小さいほどケズリの範囲が広い。ケズリ範囲値の分布をみると、45付近を谷部にして2つのまとまりが認められるので、ケズリ範囲45以上を「胴下部のみケズリ」、45未満を「胴上部までケズリ」とした(第14-25図)。ちなみに、口頸部を除いた値「頸部からケズリ部の上端までの長さ/頸部から内底面までの高さ×100」も口縁からの値とほぼ完全に相関する。ケズリ範囲値45付近を谷部とした「胴下部のみ」と「胴上部まで」の作り分けは1期、2期、3期の順に明瞭になる(第14-26図)。

このように比較的明瞭な2つのまとまりがある

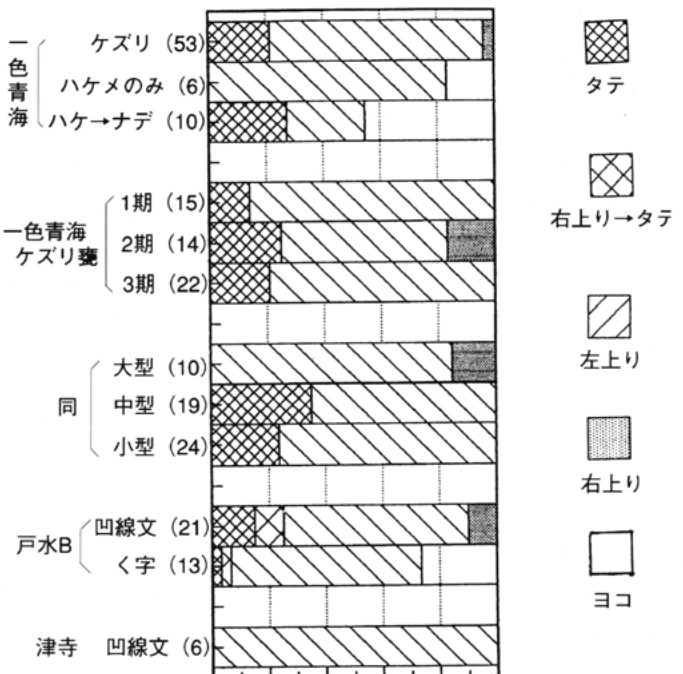


第14-28図 外面のハケメの方向

ことから、胴下部まで残らない(=器高を推定できない)ためケズリ範囲値を計算できないものの「胴下部のみ」か「胴上部まで」かを明瞭に判定できる甕も多い。以下では、これらケズリ範囲値が計測できない甕を含めて分析する。

ケズリ範囲と容量の関連をみると、大型は9割が「胴下部のみ」なのに対し、中小型は「胴下部のみ」と「胴上部まで」がほぼ半々である(第14-27図)。この傾向は一色青海2期と3期の両者にみられる(1期は大型がないため不明)ことから、時期を超えて共通する傾向と言える。さらに、「大型は中小型よりも胴下部のみケズリの比率が高い」という傾向は、一色青海ほど明瞭ではないものの大測と阿弥陀寺でも観察されることから(第14-27図)、当該期に一般的な傾向と言える(ただし、朝日では資料数が少ないため保留)。

中小型甕のケズリ範囲を時期間で比べると、一色青海では1~3期間で明瞭な違いはみられず(第14-26図)、大測でも1期と2・3期ではほぼ共通



第14-29図 内面上半部のハケメの方向

する。一方、遺跡間を比べると、阿弥陀寺（2期主体；0/7個）、大渕（1期と2・3期；6/17個）、一色青海（1～3期；20/43個）の順に、中小型甕における「胴下部のみ」の比率が高くなる。よって、中小型甕におけるケズリ範囲は、時期差よりも遺跡差の方が顕著であると言える。

b. 吉備・北陸との比較

津寺では、「胴下部のみケズリ」は大型2個のみで、他は全て「胴中部までケズリ」である。

戸水Bでは、内面ケズリ調整の上端ラインの位置を、一色青海と同様に、「口縁部からケズリ上端ラインまでの距離／器高×100」で示した。この値が30を境に「中部以下ケズリ」と「上部までケズリ」に分けると、5リットル以上の中・大型では「中部以下ケズリ」の方が多い（6/9個）のに対し、5リットル未満の小型では「上部までケズリ」の方が多い（7/11個）。

このように、内面ケズリ部位は、大型甕では胴下部に限られる点は3地域に共通する。この事実には「甕の容量が大きくなるほど上半部まで炎が当りにくくなるため、上半部まで薄手化する必要性が低かった」ためと解釈できる（小林1994）。

C. 凹線文系甕の調整工程の地域間比較

3地域の凹線文系甕の内面調整と外面調整の順序について、「土器に観察された調整間の切り合い関係」、「調整を施す際の器面の乾燥度から想定される前後関係」、および、2つの仮定に基づいて推定した。

a. 調整間の切り合い関係

3地域の凹線文系甕の内面上半部の調整には「ハケメのみ」「ハケメが痕跡的に残るナデ」「ナデのみ」の3種類がある。また、これら各々の胴上部にオサエ痕が付く場合も多い。これらの調整は、胴上部では、ハケメ（ナデの下に痕跡的・部分的に残る例も多い）、ナデ、オサエの順である。胴下部のケズリは胴上中部のハケメとナデを切って施

されており、また、オサエ痕はケズリ部位にはみられないことから、ハケメ→ナデ→オサエの後に胴下半部にケズリを施している。以上より、内面調整は、①ハケメを恐らく全面に施す、②ナデ調整を施してハケメを消す場合がある、③オサエ痕が付く、④胴下半部に縦ケズリを施す、という手順を踏んでいる。

外面では、タタキ痕→ハケメ（縦が主体）→「胴上部の横ハケメと胴下部の縦ハケメ（またはミガキ）」という切り合い関係がみられる。ただし、一色青海3類ではタタキ痕の下にさらにハケメが見える。

b. 乾燥度から想定される前後関係

内面ケズリはタタキよりも乾燥が進んだ段階で施された可能性が高い。また、内面にケズリを施す時点では、外面はハケメを施すには乾燥し過ぎているので、外面のハケメは内面ケズリよりも前に施されている。さらに、ミガキの光沢は水分1～2%以下の半乾燥状態にならないとできないことが制作実験により示されている（村田1990）ので、ミガキが調整の最終工程となる。

c. 2つの仮定

仮定1：以下の理由から内面のオサエ痕は、タタキに伴うのではなく、外面のハケメ施文時に内面を手で支えた結果と考えられる。第一に、オサエ痕は内面のハケメ・ナデの後につくことから、タタキ「成形」時の当て具痕とは考えにくい。第二に、ハケ・ナデ甕のオサエ痕とケズリ甕のオサエ痕は、内面のハケメの後に付く点などで共通性が強いことから、同じ要因でついたと考えられる。第三に、津寺の凹線文系甕のオサエ痕は、浅く比較的大きめであることから、指オサエと言うよりは手の平のようなものが当たった痕跡と考えられる。なお、一色青海では、内面のオサエ痕の頻度は、「内面全面ハケメか板ナデのハケ・ナデ甕」（オサエ痕殆どなし）、ケズリ甕（10/45

個；ハケメの上からオサエ痕が付く),「内面に痕跡的・部分的にハケメを残すハケ・ナデ甕」(16/23個),の順に高くなる。津寺では,オサエ痕が付く5個の甕は,痕跡的なハケメが残る253を除き「内面ナデのみ」である。

仮定2:タタキ痕がハケメに覆われていない部分がある3類ではタタキ目の下に一次ハケメが観察できる。一方,大多数の凹線文系甕では,タタキ痕はハケメに覆われているため,タタキの前に器面調整(ハケメなど)を行っていたかどうかについての証拠が得られないが,「タタキの前段階に器面調整(ハケメ)が施された」と仮定した。

d. 推定される凹線文系甕の調整手順

- ①タタキの前の器面調整:一色青海のタタキ痕3類でのみ一次ハケメが観察される。
- ②外面円弧状タタキ:土器を直立した状態で外面全体にタタキ成形を施す。この時,内面に当て具痕がついた可能性がある。
- ③内面ハケメ:内面にタタキの当て具痕がみられないことから,外面タタキの後に内面ハケメ(左上がり縦が多い)を施したと考えられる。
- ④内面ナデ:内面ハケメをナデ消す。痕跡的・部分的なものも含めてハケメが見える頻度は津寺,一色青海,戸水Bの順に高くなる。
- ⑤外面ハケメ:外面のタタキ痕を消す。外面にタタキ痕がみえる頻度(=ハケメの入念さ)は,津寺(中型甕3/13個)・戸水B(9/44個)よりも一色青海(33/53個)の方が明かに高い。また,タタキ痕の明瞭さは,津寺では痕跡的に見えるだけ(1類)なのに対し,戸水Bでは胴部全体に見える2類もある。一色青海ではタタキ痕が明瞭な2類やタタキが最終調整の3類の比率がより高い。
- ⑥外面胴上部の横ハケメと胴下部の縦ハケメ:胴上部横ハケメは一色青海では頻度が高いが,津寺ではみられない。津寺では胴下部に縦ハケメ

ではなくミガキが施される。

- ⑦内面下半部のケズリ:戸水Bと一色青海の中小型甕ではケズリが頸部までケズリが及ぶ例も多いのに対し,津寺の中小型甕では最大径部位までしかケズリが施されない。
- ⑧外面胴下部ミガキ:津寺(13個全て),戸水B(3/44個),一色青海(1/45個)の順に頻度が低くなる。

3遺跡の工程数を比べると,④・⑤・⑧などの点で津寺,戸水B,一色青海の順に工程数が少ないと言える。

(6) ハケメ方向

A. 外面のハケメの方向(第14-28図)

a. 一色青海の甕類型間の比較

一色青海の甕(美濃系深鉢を除く)では,胴上部の横ハケメ(最終段階に施される)を除いた外面のハケメ方向は,「縦」「左上り」「左上り→縦(上部が左上りで下部が縦)」「右上り」に分けることができる。甕類型間でハケメ方向を比べると,ケズリ甕では「縦」が7割を占めるのに対し,ハケ・ナデ甕では3者がほぼ同比率である。「右上り」はケズリ甕に少数あるのみである。

各類型の時間的変化をみると,ケズリ甕では1・2期から3期へと「縦」の比率が減り「左上り」「右上り」の比率が増えるのに対し,ハケ・ナデ甕では1期から2・3期へと「左上り」が減り「左上り→縦」と「縦」が増える。その結果,1期では「9割以上が縦のケズリ甕」と「左上りが最も多いハケ・ナデ甕」という違いが顕著だったのに対し,2・3期では相互に近づく形で両者の違いが小さくなる。

b. 容量クラス間の比較

一色青海のケズリ甕では,中・小型は「縦」が7割以上を占めるのに対し,大型では「縦」と「左上り」が共に3割程度である。一方,ハケ・ナデ

甕では、大型は「縦」と「左上がり→縦」のみなのに対し、中小型は「左上がり」が4～5割を占める。このように、ケズリ甕とハケ・ナデ甕は共に、中小型の方が大型よりも各類の主体的ハケメ方向（ケズリ甕では縦、ハケ・ナデ甕では左上がり）の比率が高い。これは、大型の方が他の甕類型との折衷が盛んに行われたためと解釈できる。

c. 吉備・北陸との比較

津寺の凹線文系甕では、外面のハケメとミガキの方向は全て「縦」である。戸水Bでは、凹線文系甕は「縦」が大半（14/21個）を占め、「左上り」と「左上がり→縦」が少数ずつある（小型に多い）のに対し、く字口縁甕は「左上り」が大多数（17/21個）を占める。このように、戸水Bと一色青海の凹線文系甕は、「縦」が主体を占める点で津寺の凹線文甕と共通するが、その比率は津寺よりもやや低い。

容量クラス間を比べると、戸水Bでは、中大型では大多数（8/9個）が「縦」なのに対し、小型（特小型を含む）では「縦」と「左上り（左上り→縦を含む）」がほぼ半々である。このように、戸水Bでは中・大型の方が小型よりも吉備の凹線文甕に近い特徴を示すのに対し、一色青海では中小型の方が大型よりも吉備との共通性が強い。

B. 内面上半部のハケメ方向（第14-29図）

a. 一色青海

ハケ・ナデ甕には「全面ハケメ」「ハケメが痕跡的に残るナデ」「全面ナデ（板ナデを含む）」の3種類があるが、ハケメがみえない後者は分析から除外した。「全面ハケメ甕」では「左上がり」が大半を占め、残り1個が「横」なのに対し、「ハケメが残るナデ甕」では「横」が半数近くを占める。ケズリ甕では、「左上り」が7割以上を占め、「縦」が次いでいる。

ハケ・ナデ甕は、内面ハケメ方向がわかる資料数が少ない上に、大半が1期に属するので、時期

間と容量クラス間の比較ができなかった。一方、資料数が充分あるケズリ甕では、内面ハケメ方向に時期差はみられず、また、容量クラス間でも「左上がり」が大半を占める点で斉一性が強かった。ただし、中小型のケズリ甕では「縦」が2～3割あるのに対し、大型のケズリ甕では「縦」がなく「右上がり」が少数あった。

b. 吉備・北陸との比較

津寺では、内面上部の調整には「ナデのみ」「ハケメを痕跡的に残すナデ」「ハケメのみ」があるが、大型、中型、小型の順に「ナデのみ」の比率が高まり、「ハケメのみ」が低くなることから、小さい容量クラスほど内面調整が入念と言える。ハケメ方向がわかる6例（大型2個、中型3個、小型1個）は全て「左上り」である。

戸水Bの凹線文系甕とく字口縁甕（大多数が全面ハケメ）は、共に「左上り」が大半を占める点で共通するが、一色青海と同様にハケ・ナデ甕（＝く字口縁甕）に「横」が少数みられる。容量クラス間を比べると、凹線文系甕の中大型では「左上り」が大多数（9/10個）を占めるのに対し、凹線文系甕の小型では「左上がり」は4/11個のみである。また、く字口縁甕（大型は資料なし）でも、中型は全て「左上がり」なのに対し、小型は「左上がり」が主体（14/24個）を占めながらも「横」が3割程度ある。このように、戸水Bの凹線文系甕とく字口縁甕は、「中大型の方が小型よりも左上がりの比率が高い」点で共通する。

C. ハケメ方向に影響する要因

内外面のハケメ方向に影響する要因として、調整としての役割と手の動きの制約が考えられる。

a. 調整としての役割

3地域の外面ハケメ方向は、凹線文系甕では「縦」が主体なのに対し、ハケ・ナデ甕では「左上がり」が主体である。ハケ・ナデ甕は、短めのハケメを胴下部から胴上部へと少しずつ移動しながら

ら施文する場合が多いが(深澤1994),これは粘土紐の接合部を補強するためと考えられる。一方,凹線文系甕では,タタキの後にハケメが施されるため接合部を補強する必要は少ないので,器壁全体を締める目的で長めの縦ハケメ(胴下部の放射状縦ハケメを含む)を一気に施したと考えられる。

一方,内面上半部のハケメ方向は,ケズリ甕と全面ハケメ甕では「左上がり」が主体なのに対し,「ハケメを残すナデ甕」では「水平」が主体を占める。また,「左上がり」と分類した内面ハケメは,「左上がり」とした外面ハケメよりも「縦」に近い角度のことが多い。「ハケメを残すナデ甕」の内面ハケメは,ナデの前段階に施されることから,粘土紐の接合部を補強するために「水平」が主体を占めたと推定される。一方,全面ハケメ甕とケズリ甕の内面ハケメでは,その前段階において既に接合部を補強する調整が行われているので,接合痕の補強よりも器壁を締めるためにナナメ方向に施したと考えられる。

以上のように,内外面とも,「横」方向のハケメは「ナナメ」「縦」方向のハケメに比べ,接合部を補強する役割が大きかったと考えられる。

b. 手の動きの制約

内面のハケメは,外面のハケメに比べ,①凹線文系甕,ハケ・ナデ甕共に「左上り」が主体を占める(ただし,「全面ハケメ甕」では横が主体)点で共通性が強い,②時期間,容量クラス間の違いが小さい,という特徴がある。このように内面の方がハケメ方向が斉一的な理由として,内面上部にハケメ工具を当てる時には外面よりも腕の動きが制約を受ける(土器を直立させて調整を施す場合,右ききならば左上りになることが多い)ことがあげられる。

(7) 野焼き方法と器形との関連(第14-30~32図)

内外面の黒斑の位置から判定される「野焼き時

の土器の設置角度」,および,黒斑や火色の出現頻度や色調から推定される「火回り具合」を検討する。黒斑の特徴から野焼き方法を推定する手続きについては久世ほか1997を参照されたい。黒斑の分析では,器種間と甕類型間の比較を行った。

A. 土器の設置角度

a. 甕(13個)

甕の黒斑は,台の有無と系統により違いがみられた。即ち,凹線文系甕(平底)は5点とも内・外A面(野焼き時に下向きの側)の胴下部~底面に黒斑が付くことから,直立に近い角度(野焼き実験では60°以上)で設置されている。また,平底のハケ・ナデ甕(815, 818, 954)も外A面の胴下部から底部に黒斑が付くことから垂直に近い角度で設置されている。

一方,台付であることが明かなハケ・ナデ甕(814, 820)と美濃系深鉢169(平底)は内・外A面の胴中部に黒斑が付くことから,水平に近い角度で設置されている。また,底部が欠失しているが胴下部の割れ口の形から台付甕とわかるものについては,ハケ甕956は内A面胴中部に黒色黒斑が付くことから水平に近い角度で設置されており,ナデ甕953は,胴下部の黒斑の下端の位置がコゲのため見えないが,「垂直に近い」か「中間」である。

b. 壺(9個)

黒斑を観察できた壺は,細頸壺(口縁部が内湾して受口状になる)5個,台付の細頸壺1個,三河系大型壺1個,丸窓付き壺2個である。細頸壺では,内面の黒斑が観察しにくいので,外面の黒斑の位置から設置角度を推定したものもあった。

細頸壺は,外A面胴中部,外A面口縁部,内A面胴中・下部に黒斑が付くことから「水平に近い角度」に設置したと考えられる563・597と,外A面胴下部から底部に黒斑が付くことからやや斜め(立てて)に設置したと考えられる791・568とが

ある。細頸壺 562 は内外面とも黒斑がないため設置角度はわからない。台付壺 652 は、台部の内底面が真黒色であり、また、内面はA面に偏らずに全体が真黒色であることから、直立したと考えられる。三河系大型壺 655 は外A面は胴上部から底部まで細長い黒色黒斑が付く、対応する内A面にも胴中部から下部に薄い黒斑が付くことから、水平と垂直の中間の角度で設置したと考えられる。丸窓付き壺は、丸窓を上向きにして水平に近い角度で設置した 803 と、丸窓を斜め下向きにして中間の角度で設置した（内A面胴中・下部と外A面胴下部～底部に黒斑）951 がある。以上のように、壺の設置角度は、台付き壺は直立、平底の壺では水平に近い角度と中間の角度とがある。

高杯（945）は台部が欠失しているが、外A面口縁部～胴上部に最も顕著な黒斑が付くことから、杯部と台部の縁辺が接地するように横倒しに置いたことが分かる。鉢（810・812）は、外A面胴下部から底部にかけて黒斑が付くことから、やや立てて設置したと考えられる。

以上のように、設置角度は、台付土器（甕・深鉢・鉢・高杯）と深鉢は横倒し、平底の甕と鉢は垂直に近い角度、壺は横倒しまたは立てる、というように、土器の形（特に台の有無と相対的深さが重要）により調整されている。

c. 北陸との比較

戸水B遺跡では、凹線文系甕は全て内外A面の胴下部から底部にかけて黒斑が付くことから、「垂直に近い角度」で設置されている。一方、く字口縁甕では内面胴上・中部から底面にかけて細長い黒斑が付く例（小林1994での土器番号7032, 7076）や内面胴下部に黒斑が付くが底部まで及ばない例（7059）があることから、凹線文系甕よりはやや水平に近く設置されたものもある。ただし、く字口縁甕（または壺？）の中でも大型の7077（17.10リットル）は直立に近い角度で設置されている。このよ

うに、灰色系の土器（後述する）は褐色系の土器よりも設置角度がより垂直に近い傾向がある。

B. 内面の黒斑の出現頻度

一色青海の甕では、コケなどのため黒斑が観察できなかった814・815を除き、全て内A面に黒斑が付く。これら内A面の黒斑は、薄い灰色の678・820を除き、明瞭な黒色を呈する。

壺では、内面全面黒色黒斑（台付き壺652と丸窓付き壺803）、内面胴部全体に灰色黒斑（内A面に黒色黒斑568）、内A面に薄い黒斑（597, 655, 951）、黒斑無し（562, 563）などの種類があり、頸部の括れが強い割には内面の火回りが良いものが多い。内面の黒斑の顕著さと設置角度には相関はみられない。

C. 外B面（野焼き時に上向きの側）の黒斑

一色青海の甕では、欠失や煤などのため外B面の黒斑が観察できない場合が多い。壺では、内外面とも黒斑の無い562と、直立して設置した台付き壺652を除き、外B面胴中部に黒斑がみられる。このように壺では外B面の黒斑が明瞭に付く理由として、壺は甕よりも水平に近い角度で設置されることが多く、また、胴部の張りが強いことから、上向き側（外B面）に灰が載りやすく、またイネ科草燃料の覆いと接触し易いことがあげられる。

戸水B・一色青海では甕・壺・高杯に火色が付く例がない。甕の多くでは欠失や煤のために外B面の火色の有無が不明だが、壺や鉢に火色が見られないことから甕にも火色があった可能性は低い。

D. 色調

a. 一色青海の甕類型間の比較

ケズリ甕とハケ・ナデ甕は色調が異なる傾向がみられた。即ち、黒斑や炭化物を観察した残り具合のよい甕（ただし住居出土土器は火災を受けているため除外）を対象とすると、ケズリ甕は灰色系（821, 950, 957, 958）と褐色系（678, 827, 948）の両者があるのに対し、ハケ・ナデ甕と条痕

深鉢では褐色系（169, 659, 815, 816, 817, 818, 820, 953, 954, 956）の方が灰色系（955）よりも圧倒的に多かった。

b. 吉備・北陸との比較

吉備の第四様式土器の色調は灰色系（灰白色から鈍黄燈色）と褐色系に大別され、前者が多いことが指摘されている（岡山県教育委員会 1995）。

戸水Bでは、以下のように、灰色系が主体の凹線文系甕と、褐色系が主体のく字口縁甕の違いが明瞭である。即ち、黒斑と炭化物を観察した残り具合のよい甕を対象とすると、凹線文系甕では灰色系（小林1994での土器番号6002, 6025, 7003, 7040, 7059, 7061）が大多数を占めるのに対し、く字口縁甕では褐色系（7032, 7037, 7076, 7087, 7100, 7126, 7128）が大半を占め、灰色味を帯びた褐色（7074, 7098）が少数ある。

このように、北陸でも「凹線文系甕は非凹線文系甕よりも灰色系の色調が多く、吉備の凹線文系甕の色調と共通する」という傾向が、一色青海よりもさらに明瞭に観察された。このような凹線文系甕の共通性を生み出した理由として胎土の選択方法と野焼き方法の2つが考えられるが、①灰色系の色調を出す鉱物組成の粘土をこの時期のみ各地域で選択したとは考えにくい、②吉備の凹線文系甕との形・調整の共通性が強い北陸の方が、凹線文系甕と在地系甕との違いが顕著である、などの点から、粘土の鉱物組成というよりは共通した野焼き方法がより重要な要因だったと考えられる。

（8）結論

本稿では内面ケズリとタタキの有無により、北陸・東海地方の第四様式の甕を凹線文系甕とハケ・ナデ甕に区分した。両地域の凹線文系甕は、ハケ・ナデ甕に比べて、①5リットル付近を境にして中型と小型に作り分けられる傾向が明瞭である、②頸部の括れが強い、③外面のハケメが長めであり、

縦方向の比率が高い、④灰色がかった色調をしている（両類は別々に野焼きされた可能性がある）、という特徴を持つ。さらに第五の特徴として、戸水Bでは、凹線文系甕の方が大型の比率が高い。そして、これらの凹線文系甕の特徴は、伝播元である中国地方の凹線文系甕（本稿では吉備の津寺遺跡で代表させた）と共通している。

一方、加賀と尾張の間には以下のような違いがみられた。戸水Bでは上述の特徴における凹線文系甕とく字口縁甕の違いが明瞭なのに対し、一色青海では以下の点で両類間の違い（作り分け）が不明瞭であるか、または、1期から3期へと徐々に不明瞭になっていく。第一に、5リットル付近を谷部とする中型と小型の分化は、凹線文系甕ほど顕著ではないものの、ハケ・ナデ甕にもみられる。第二に、頸部の括れ度と相対的深さにおける凹線文系甕（ケズリ甕）とハケ・ナデ甕の間の違いが1期から2・3期へと小さくなる。第三に、外面ハケメ方向における両類の違いも1期から2・3期へと小さくなる。第四に、凹線文系甕では1期から3期へと台付の比率が増える点で、ハケ・ナデ甕と共通性が強まる。第五に、凹線文系甕とハケ・ナデ甕の容量クラス組成に明瞭な違いがみられない。これらの事実は、石黒氏が指摘したように東海地方の凹線文系甕は在地のハケ・ナデ甕の要素を取り入れる方向で変化したことを示している（石黒1990）。

このような「凹線文系甕とハケ・ナデ甕の作り分け程度」における北陸・東海間の地域差は、「ハケ・ナデ甕から凹線文系甕への交代の速さ」の地域差と関連すると考えられる。朝日や一色青海3期では凹線文系甕が甕の8割以上を占めることから、比較的急激にハケ・ナデ甕から凹線文系甕に交代したと言える。一方、戸水Bでは凹線文系甕が甕の大多数を占めることはないことから、比較的長期間にわたり凹線文系甕とハケ・ナデ甕（く

14. 凹線文系甕の取入れ方の二相：加賀と尾張の比較

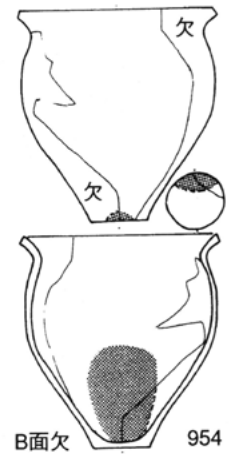
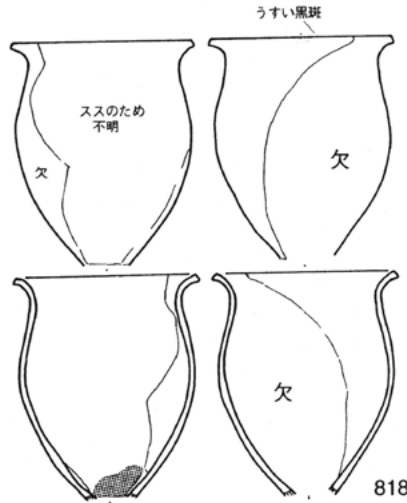
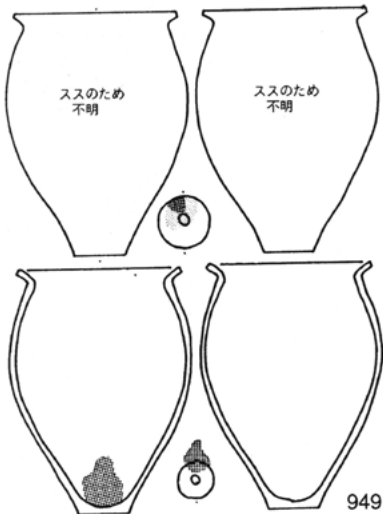
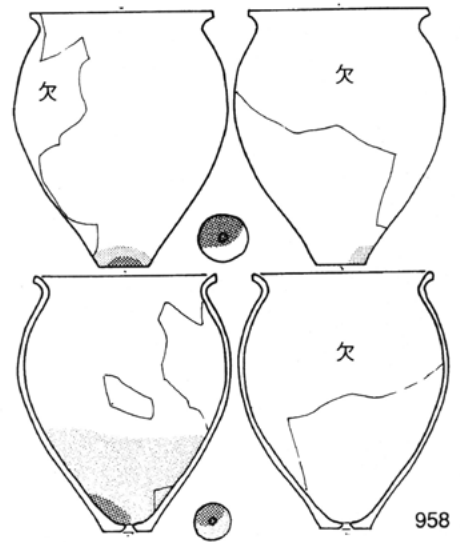
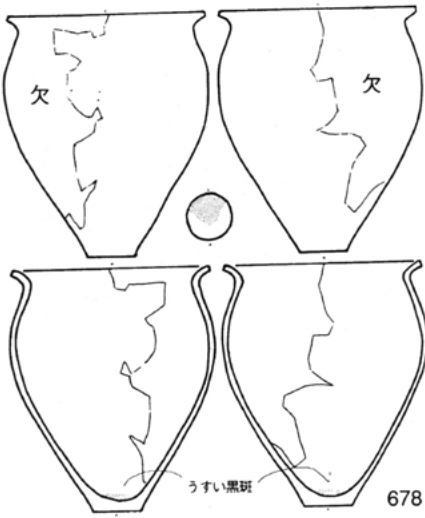
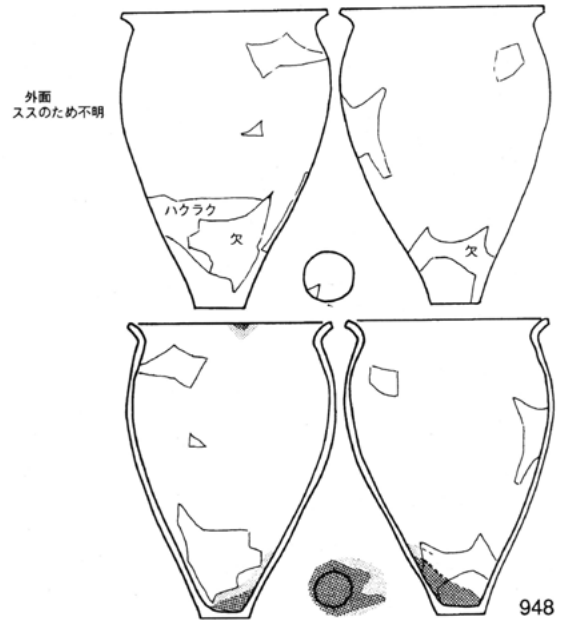
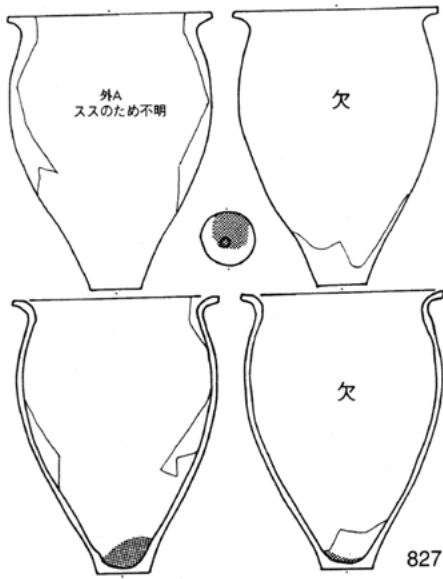
字口縁甕)がセットとして使われ続けたと言える。組成比を具体的に示すと、戸水B遺跡6～8次調査の報告書では、凹線文系甕とく字口縁甕の比率により古相を主体とする遺構と新相を主体とする遺構を抽出しているが、新相の遺構(最も土器出土数が多いSD701)でも、胴部最大径部位まで残る(=容量クラスが判定できる)甕23個中凹線文系甕52.2%,く字口縁甕30.4%,近江系甕17.4%である。

以上の事実から、「加賀では在地系く字口縁甕と新来の凹線文系甕が(使い方の違いを念頭において)ある程度作り分けられたため、長期に渡って共存したのに対し、尾張ではケズリ甕とハケ・ナデ甕の機能分化が不明瞭だったため、共存期間が比較的短く、両者の特徴が相互に近づく形で短期間に凹線文系甕主体の組成に変化した」という仮説が提示される。

謝辞 本稿は以下の方々のご好意により形になりました。記して感謝いたします。石黒立人、蔭山誠一、柳瀬昭彦、福田正継、栃木英道、安英樹、中屋克彦、河合忍、稲石純子、深澤芳樹(敬称略)

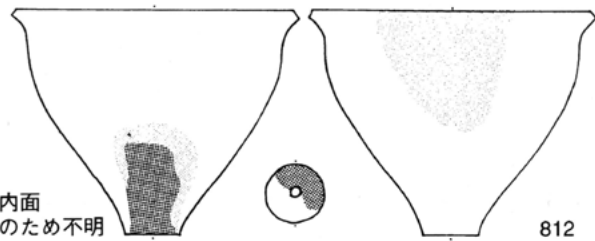
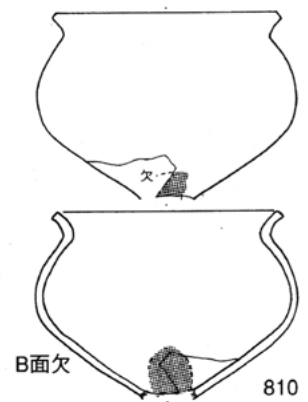
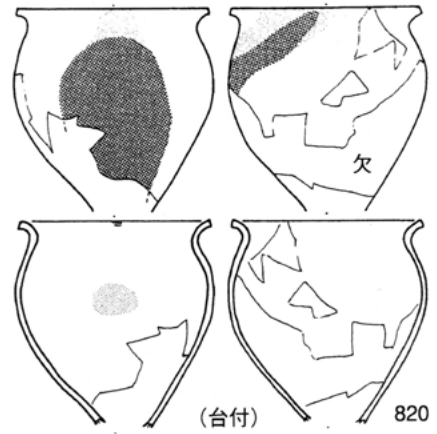
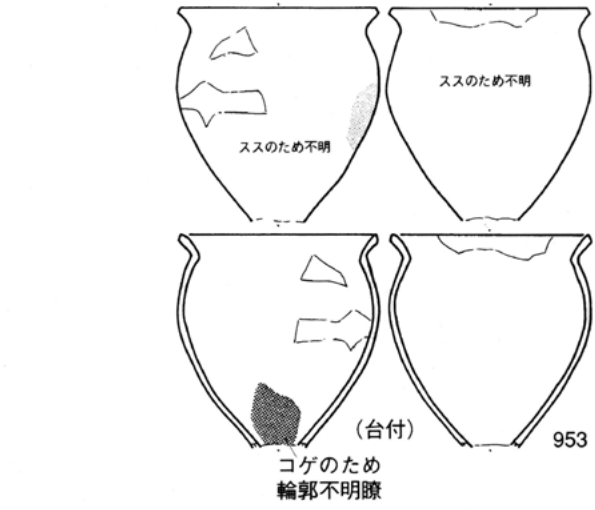
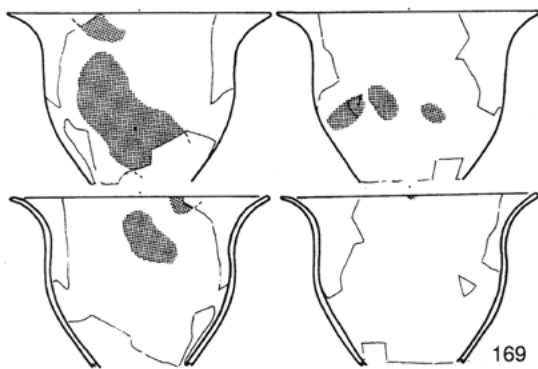
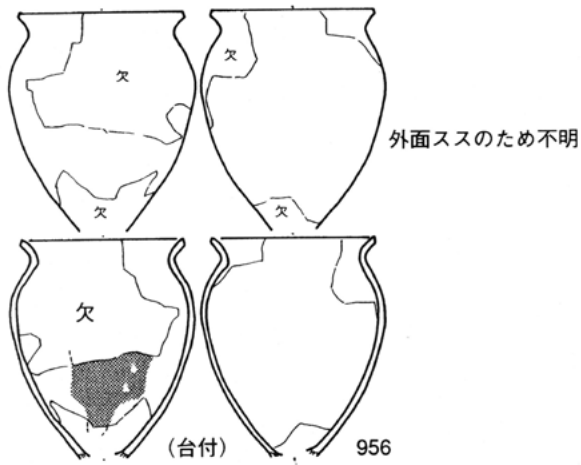
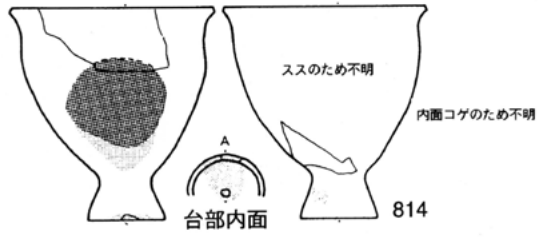
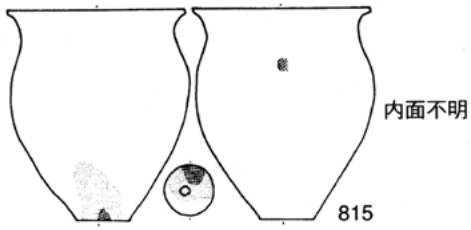
引用参考文献

- 藤村東男1981「土器容量の測定」『考古学研究』28(3):106～117
- 深澤芳樹1994「尾張における凹線紋出現の経緯—朝日遺跡出土土器の検討から—」『朝日遺跡Ⅴ』pp.273～288,愛知県埋蔵文化財センター調査報告書34 愛知県埋蔵文化財センター
- 深澤芳樹1998「東海洋上のタタキ技法」『一色青海遺跡』pp.115-130,愛知県埋蔵文化財センター調査報告書79 愛知県埋蔵文化財センター
- 石黒立人1990「弥生中期土器にみる複数のく系」『考古学フォーラム』1:1～38,愛知考古学談話会
- 石黒立人1990「弥生時代の遺構と遺物」『阿弥陀寺遺跡』pp.245～288,愛知県埋蔵文化財センター調査報告書11 愛知県埋蔵文化財センター
- 石黒立人1991「弥生中期土器にみる複数のく系」その2—大渕遺跡並行期を中心に—『大渕遺跡』pp.77～90,愛知県埋蔵文化財センター調査報告書18 愛知県埋蔵文化財センター
- 石黒立人1994「朝日遺跡出土土器について」『朝日遺跡Ⅴ』pp.129～272,愛知県埋蔵文化財センター調査報告書34 愛知県埋蔵文化財センター
- 小林正史1994「弥生時代の甕の器形と制作技術による作り分け—戸水B遺跡を中心として—」『金沢市戸水B遺跡』pp.114～151,石川県立埋文センター
- 小林正史1995「縄文から弥生への煮沸用土器の大きさの変化」『北陸古代土器研究』5:110～130
- 小林正史1997「弥生から古墳初頭の甕の作り分け」『北陸古代土器研究』6:106～132
- 久世建二・北野博司・小林正史1997「黒斑からみた弥生土器の野焼き技術」『日本考古学』4:41～90
- 村田章人1990「器面調整の実験的研究」『考古学研究』147:106～124
- 中屋克彦ほか1992『金沢市戸水B遺跡第4・5次調査』石川県立埋蔵文化財センター
- 中屋克彦1994『金沢市戸水B遺跡』石川県立埋蔵文化財センター
- 岡山県教育委員会1995『津寺遺跡2』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告98
- 横山浩一1980「須恵器の叩き目」『史淵』117:127～155

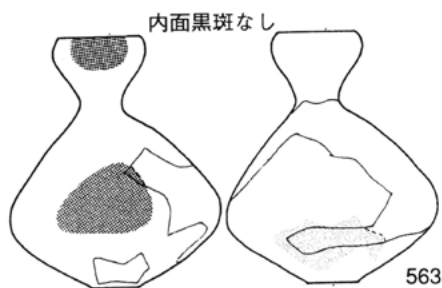
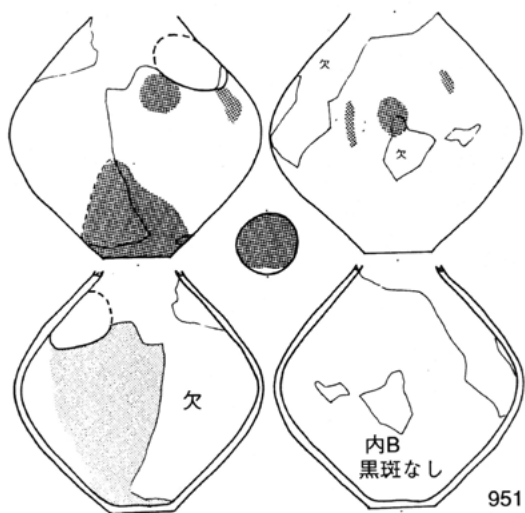
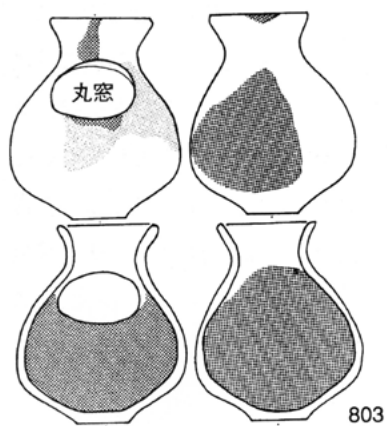
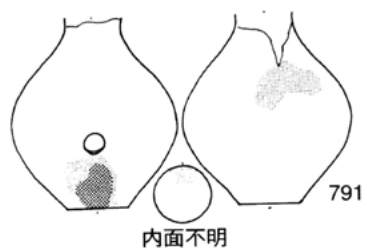
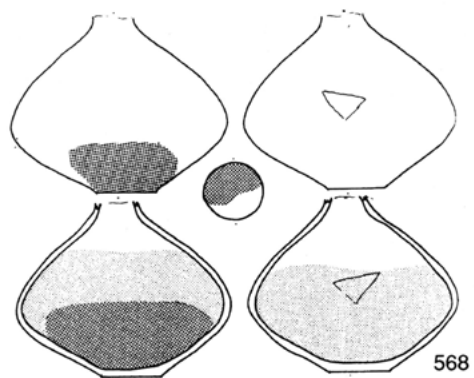
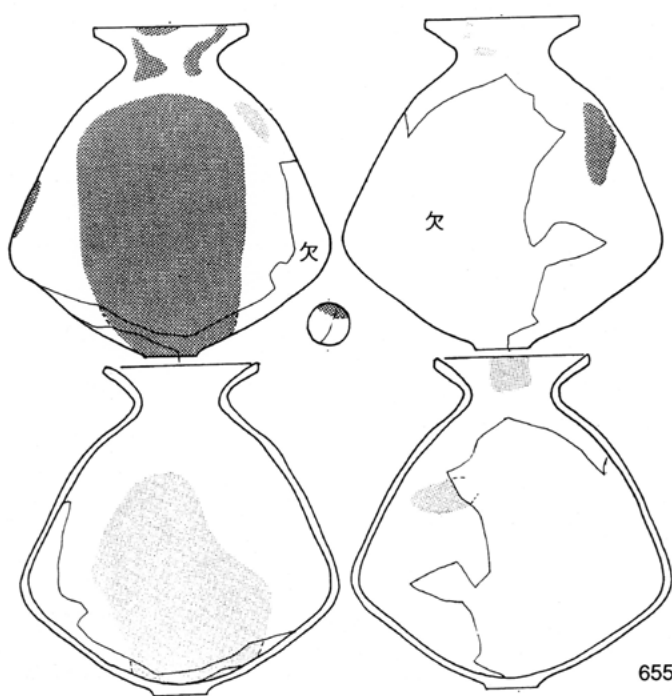


第 14-30 図 一色青海遺跡の甕の黒斑 (S=1/8)

14. 凹線文系甕の取入れ方の二相：加賀と尾張の比較



第14-31図 一色青海遺跡の甕と鉢の黒斑 (S=1/8)



第14-32図 一色青海遺跡の壺の黒斑 (S=1/8)